

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008 報 告 書

2009年（平成21年）3月

認知症介護研究・研修センター（東京・大府・仙台）
住友生命保険相互会社

ごあいさつ

認知症の人を支援するにあたって、その人らしさを大切にするという理念が掲げられてから、認知症ケアは大きく変わってきました。認知症と正しく向き合い支え合うさまざまな活動が地域に芽吹き始め、これを広く社会に伝えていこうと、「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンを開始して、今年で5回目となります。2004年秋に行われた、「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004」の場での発表会がその第1回にあたりますが、地域ケアが認知症ケアの重要な軸になっていくことを全国に、そして国際的に発信した瞬間でした。

本キャンペーンには、毎年全国各地から、認知症になっても安心して暮らせる町づくりの活動が寄せられています。今年度は各地から70に及ぶ応募をいただき、内容も豊富でユニークな発想がみられました。認知症の人を支えるという考え方から進化し、認知症の人と共に暮らしていくという共生の理念が強くなっていることがうかがえました。この中から、昨年11月の一次推薦委員会、同12月の地域活動推薦委員会（最終推薦委員会）での慎重な検討を経て、今後の町づくりのモデルとなる7つの活動が「町づくり2008モデル」に決定し、発表会にて報告されました。

本キャンペーンは優劣を競うものではありません。これまで寄せられた活動すべてに、認知症の人と地域の人々がともに尊重しあって暮らしていくための工夫や経験があふれています。報告書やホームページなどですべての活動をご紹介しますので、こうした貴重な積み重ねを参考にいただき、こういった取り組みならば自分たちの町でも始められそうだ、自分たちの活動にこの工夫を取り入れよう、と取り組んでいただきたいと思います。こうした動きが広がるよう、私たちもよりいっそうの情報提供をしてみたいと思います。

長寿社会にあって、認知症は、ひとにぎりの専門家や介護専門職の仕事というよりも、市民一人ひとりが自分のこととして考えていくことが大切です。さまざまな職種の方がそれぞれの立場を生かして、認知症になっても尊厳を保持して生きていくことを支える、しかも地域全体で支えるという仕組みをつくっていくことが必要です。ぜひ、認知症の人や家族とともに住み慣れた地域でともに暮らしていく活動をすすめてまいりましょう。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008

実行委員長 長谷川 和夫

報告書の刊行にあたって

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００８」では、２００８年６月より全国で認知症の人を地域で支える活動を展開している活動報告の募集を行い、慎重な検討の結果、２００８年１２月に「町づくり２００８モデル」を決定しました。

そして２００９年３月に「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会の場において、表彰式と「町づくり２００８モデル」団体による地域活動の発表を行いました。

本キャンペーンは、厚生労働省と認知症にかかわる各団体による国民的な「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの一環として行ったものです。

各活動報告の本報告書への収録にあたっては、活動している団体および個人の表現のスタイルを尊重し、原則として原稿に改変を加えることは行っていません。このため、表記に不統一の部分があります。

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００８」は、厚生労働省老人保健健康増進等事業の補助金および住友生命保険相互会社のご支援をいただいて運営が行われました。あらためて感謝申し上げます。

本報告書が、全国各地で認知症の人とそのご家族を支える活動を続けておられる皆様のお役に立つように願っています。

２００９年３月

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００８ 事務局

目 次

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008実行委員長から経過報告(発表会より) 3
2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008地域活動推薦委員長から総括(発表会より) 4
3. 全応募者への応援メッセージ 5

II. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008へ全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧 13
2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介 16
3. 「町づくり2008モデル」一覧 17
4. 「町づくり2008モデル」
活動報告(1)「仲間と共に、若年認知症をイキイキと！」 19
若年認知症グループ どんどん(神奈川県川崎市)
活動報告(2)「公立中学校の空き教室・花壇を住民と中学生が協働作業を通して認知症を正しく理解する」 33
社会福祉法人 リデルライトホーム(熊本県熊本市)
活動報告(3)「認知症メモリーウオーク・千葉」 49
第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会(千葉県)
活動報告(4)「目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング」 63
目黒認知症家族会 たけのこ(東京都目黒区)
活動報告(5)「親父パーティーが地域を変える！～認知症地域資源ネットワーク『NICE!藤井寺』の構築～」 77
社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会(大阪府藤井寺市)
活動報告(6)「であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援『あんしんメイト』」 89
NPO法人 認知症サポートわかやま(和歌山県和歌山市)
活動報告(7)「地域と共に歩む老人ホームを目指して」 105
社会福祉法人 ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名(沖縄県那覇市)
5. 各地域活動概要 113

III. 資料編

1. 実施要領 179
2. 推薦基準 183
3. 発表会について 185
- 附:活動経過 187

活動報告(4)

活動名称	目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング
活動要旨	家族会が中心となり、体験型認知症啓発イベントを開催。首都圏の10数グループとともに介護者の会ネットワークを結成し、交流イベントの開催から新たなネットワークが生まれるなど、協力の輪を広げている。
応募者	目黒認知症家族会 たけのこ 竹内 弘道
連絡先	〒153-0053 東京都目黒区五本木1-15-11

1)推薦理由

- ・ 家族が力を発揮しながら、本人・専門職（医療・保健・福祉）・地域住民に見事にネットワークの輪を広げてきた好例である。活動も日常的なものとイベントとを多彩に組み合わせており、家族会ならではの取り組みである。
- ・ 地道な活動が実を結んでいる。ネットワークづくりが多く地域で課題となっている今、ネットワーク形成のプロセスは他の地域でも参考にできる。
- ・ 家族会の社会化として捉えることもでき、家族会が区の保健師に支えられながら自らの体験を語り、回を重ねることで一回り大きなグループへととなっている。全国にある家族会が今後各地で広がっていくための1つのモデルである。

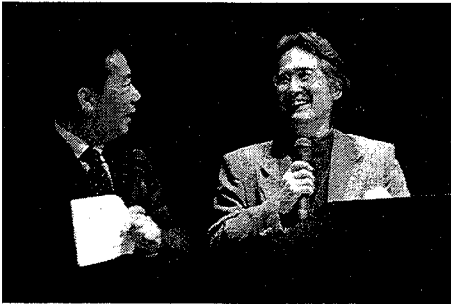
2)3月7日キャンペーン発表会 <インタビュー抜粋>

町永◆自分の言葉で等身大の感覚で語っていただきましたが、家族会というニーズに一番近いところからの活動という強みがあるのでしょうか。

竹内◆そう思います。みんなそれぞれ、いろいろな認知症の人をみえていますから、自分のことだけでもいろいろなことがみえてきます。等身大というか、そこから出発しないと何もみえてこないと思います。

町永◆家族、社協、保健師さんのコラボレーションで活動されているとのことでした。他の地域でもできるのではないかと思います。なぜ他のところでなかなかできないのか。何が必要なのでしょうなのか。

竹内◆たぶん、たけのこができたときに区にはとても有能な保健師がいて、こうしたことを仕組んでくれたと思います。ぼくたちも最初、そのメリットに気がつきませんでした。活動しているうちに、こうした協力はとんでもないことだ



なと思うようになり、むしろそれに肉づけしていったというのが、今のぼくたちです。どう仕組んだというかは、本人にきいてもらったほうがよいでしょうね。(客席の保健師をさす)

町永◆やはり保健師さんの活動があったからでしょうね。(会場で保健師さんが同意。会場、笑)

町永◆ああいう風に率直にいえるところがいいですね(笑)

3)3月7日キャンペーン発表会 <発表資料>

目黒たけのこ流 認知症ネットワークング



目黒認知症家族会
たけのこ

たけのこの例会

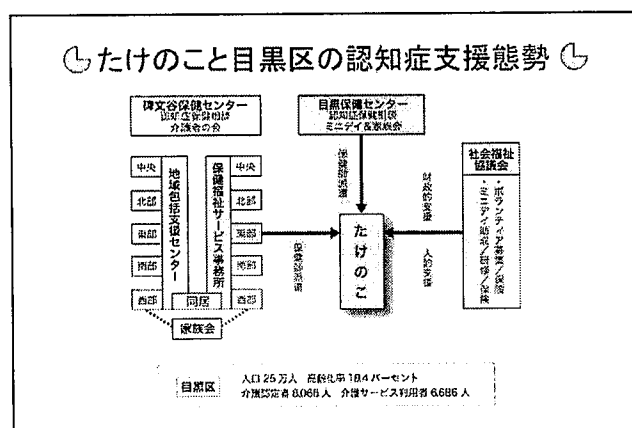
ミニデイサービス



家族交流会・学習会



ミニデイ付時家族会
・第1・第2ホウモ
午前9時半～12時
・中目黒スクエア集合室



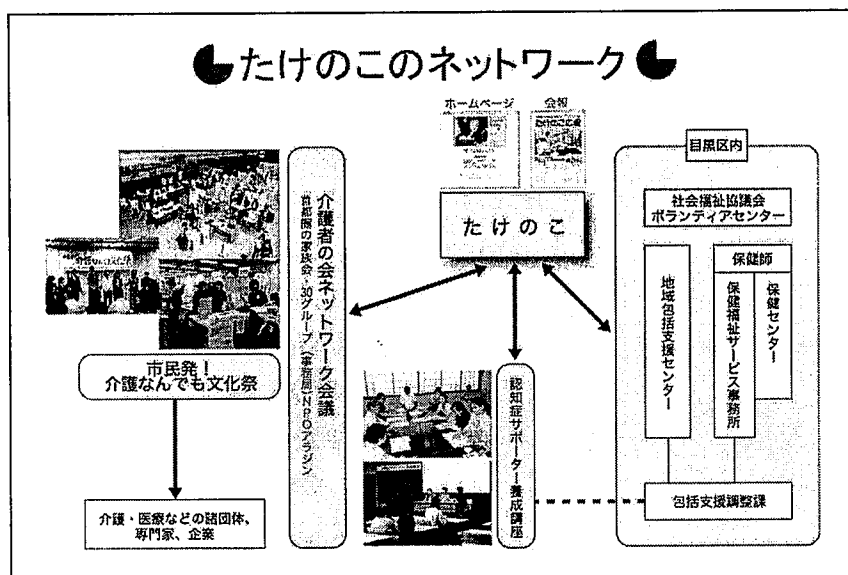
認知症啓発イベント[たけのこ広場]

ミニフォーラム 交流会 音楽会



体験ミニデイ

イベント「たけのこ広場」
・年1回月曜11時～5時
・区総合庁舎大ホール5階
《内容》
「認知・記憶力による認知相談」
「ミニフォーラム」「交流会」
「体験ミニデイ」「音楽会」



3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概要

目黒認知症家族会 たけのこは、1998年4月から活動しているが、介護保険制度のスタートを境に、会員数の低落傾向が始まった。通所介護などの利用が促進されたためと推察された。低迷を脱するための情報を探るうち、介護者の会ネットワーク会議の存在を知った。NPO 法人介護者サポートネットワークセンター・アラジンの呼びかけで、首都圏の10数グループが結成した「草の根家族会」の集まりである。2003年秋の第2回会議から参加し、交流を通じて、たけのこの持つ得がたい“資源”―①人的資源＝保健師とボランティア ②支援体制＝区と社会福祉協議会―を再認識した。

たけのこの活動は区の保健師に支えられてきた。区内を巡回し地域の実情を知悉する“地域資源”だ。[介護者の会ネットワーク]で知り合った専門家に協力と参加を依頼し、保健師のノウハウを活かす形で、04年から体験型の認知症啓発イベント「たけのこ広場」を始めた。「個別相談」「介護者交流会」「体験ミニデイ」「認知症ミニフォーラム」などの内容で、年1回の開催。今年6月の「第5回たけのこ広場」には130人を超える人々が集まった。

「個別相談会」は医師と保健師と包括支援センターのスタッフがチームを組んで、医療・介護の総合的なアセスメントを行う。「交流会」は1テーブル10人以下に設定し、専門の心理職、たけのこのメンバー、保健師・包括スタッフが進行役を務める。「体験ミニデイ」も同様の態勢で認知症の人を迎える。「ミニフォーラム」の講師はフォーラム終了後は交流会に合流する。今年は区の保健師9人、地域包括支援センターからも9人、さらに区と社協の職員6人が中核スタッフとして参加した。行政現場とのネットワークも確

かなものになっている。

たけのこは発足以来、区の人的援助(保健師の派遣)と社協のミニデイ支援(助成金、ボランティア募集、保険等)を受け、「ミニデイと家族交流会を同時開催する」活動が続けてきた。[たけのこ広場]はその拡大版である。[広場]を通じて保健師や包括スタッフとの“コラボ感”が深まり、日々の活動にも協力して取り組むようになった。問題を抱えている家族を「たけのこで慣らし運転してから介護保険サービスに誘導する」といった取り組みだ。

デリケートな認知症の人と介護者には、こうした「助走期間」が必要だ。そこにたけのこの10年のノウハウが活かしている。DVや介護うつの人も保健師に伴われてやってくる。

[たけのこ広場]は介護者の会ネットワークにも刺激を与え、05年から「介護なんでも文化祭」という首都圏規模のイベントがスタートした。年々、規模が拡大し、昨年、浜松町の都立産業貿易センターで行った第3回では来場者は600人に達した。[文化祭]からは、福祉団体・グループ、企業、医療NPOなどとのネットワークの連鎖が起こっている。

目黒区の認知症サポーター養成講座では、「家族会から伝えたいこと」というコーナーが好評で、終了後も懇談していく人が多い。

地域に密着した出前講座も増えており、そうした中から、地域の多様なグループとの交流が生まれている。目黒ローカルでもネットワークの連鎖が起こりはじめている。

ネットワーキングの結果、低迷していた会員数も大きく回復した。例会の見学者も増え、家族会、行政の担当者、学生などがしばしば訪れる。今後は「在宅ターミナル」などの問題に真剣に向き合わなければならない。[広場]や[文化祭]で得たネットワークの先を探り、これからもたけのこ流のネットワーキングを模索していこうと思う。

[ミニデイ & 家族会]



会報の製本作業



カレンダーづくり



音楽活動



家族交流会

[たけのこ広場]



ミニフォーラム



交流会



体験ミニデイ

[認知症サポーター講座]



[介護なんでも文化祭]



2. 地域の紹介

目黒区の高齢者福祉の概要

東京都目黒区は人口 25 万人、高齢化率は 18.4%である。介護認定者 8,066 人、介護サービス利用者は 6,686 人を数える。認知症に関係する介護保険サービス(表 1)は十分とはいえず、特養は入所者 877 人に対し待機者 779 人という状況である。(20 年度版「目黒区の健康福祉」より)

区内 5 地区に保健福祉サービス事務所が置かれている。2006 年からは地域包括支援センターが各保健福祉サービス事務所に設置され、民間への委託により運営されている。保健福祉サービス事務所の保健師と包括支援センターのスタッフ(保健師、看護師、社会福祉士、主任ケアマネ等)が協力して高齢者の支援にあたっている。

表 1) 認知症関連の介護サービス施設数

特別養護老人ホーム		6 (別に区外契約 15)
老人保健施設		2
療養病床		1
有料老人ホーム		10
地域 密着 型	認知症高齢者グループホーム	4 (6 ユニット)
	認知症対応デイ	5
	夜間対応型訪問介護	1
	小規模多機能ホーム	1

認知症の支援

目黒区には 2 つの保健センターがあり、毎月認知症高齢者保健相談を行っている。認知症高齢者家族の会もあり、目黒保健センター「すみれ」は年 10 回、碑文谷保健センター「すずらん会」は年 6 回の開催である。

2007 年から認知症サポーター養成講座を開催。これまでに認知症キャラバン・メイト 94 (区養成 84) 人、認知症サポーター 1,292 人を養成している。2009 年度末で 2000 人のサポーターを誕生させる計画だ。

たけのこの歩みと概要

目黒認知症高齢者と家族の会 たけのこは、1998 年 4 月、目黒保健センター主催の家族会「すみれ」の主要メンバーが自主グループとして独立し、活動を始めた。発足にあたっては目黒保健センターと目黒東部保健福祉サービス事務所が「保健師の派遣」という形で人的援助を行い、目黒区社会福祉協議会がたけのこを“ミニデイ”グループに認定し、人的援助(ボランティア募集)と財政的援助(ミニデイ助成、ボランティア保険等)を行うことになった。こうして「ミニデイと介護者の交流会を同時に開催する」という活動が、認知症家族と区と社協のコラボレーションでスタートした。

2004 年 7 月、活動のもうひとつの柱であるミニデイ／認知症介護 家族交流の集い「たけのこ広場」を始めた。一般区民を対象にした 100 人規模の会で、年 1 回の開催を続けている。

2007 年に 5 人の認知症キャラバン・メイトが誕生した。以後、区の認知症サポーター養成事業に協力し、講師として「家族会から伝えたいこと」というコーナーを担当している。

2008 年 9 月、名称を目黒認知症家族会 たけのこに改めた。従来の名称から「高齢者」を外したもので、若年性認知症の人が増加している現状に対応した。

たけのこのメンバーは認知症の家族会員、ボランティア、サポーターズ・クラブという名の協力会員で構成されている。(表 2)

他にテンポラリーのボランティアが数グループ(約 30 人)、会の活動を支援している。

表 2) たけのこのメンバー

種別	人数
家族会員	39 人 (21 家族)
協力会員	10 人
ボランティア	14 人
非定期ボランティア	約 30 人 (5 グループ)

たけのこは主に次の活動を行っている。

■ミニデイ併設・認知症家族会 月 2 回 中目黒スクエア。

■たけのこ広場 年 1 回 目黒区総合庁舎

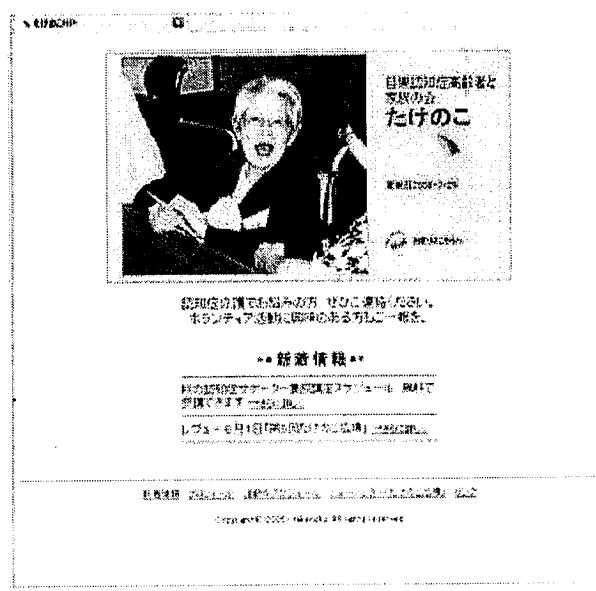
ほかに「食事会」「まち歩き」などの外出活動を適宜開催。今年 10 月には初の一泊旅行を予定している。「学習会」や「自主企画認知症サポーター養成講座」も定期的で開催している。

会報「たけのこ広場」(季刊)を 200 部発行。会員のほか区の関連部署、福祉関係団体、協力者・グループなどに配布している。2007 年にはホームページを開設した。

会報



ホームページ



URL <http://takenoko.kazekusa.jp>

3. 活動の内容

たけのこは毎月の「ミニデイ併設・家族交流会」と年1回の「たけのこ広場」を活動の柱にしている。

例会「ミニデイ併設・家族交流会」

「ミニデイ&家族会」は第1・3金曜日午前に開催している。2時間半の活動の前半は、認知症の人を囲んで、軽い作業や体操、レクリエーションなどを行う。本人と介護者とボランティアと一緒に活動する。年に数回は音楽演奏、ダンス、大道芸、手品など、専門ボランティアのパフォーマンスを鑑賞する。いずれも「認知症の人を中心に据えた」「認知症の人のペースを基本にした」活動である。

コーヒープレイクを挟んで、後半は本人と家族は別の活動を行う。本人はボランティアや保健師の見守りで主に音楽活動を行う。専門の音楽ボランティアがサポートする。別室では介護者の交流会を行う。互いの介護談を聞き合い、さまざまな介護情報を交換する。



ミニデイ カレンダーづくり

ミニデイと家族会を同時開催する意義

全員参加のミニデイ活動を通じて、介護者は親の、あるいは配偶者の「知らなかった顔」を発見する。会話を交わし、“作業＝仕事”をすることで認知症の人はいきいきとする。

「家では見せない表情」「知らなかった能力」「聞いたこともない生活史」などに家族は気付かされる。同時に、本人の残された機能(できること)を刺激することの大切さを知る。「仕事」の進み具合に口を出し、手を出し、叱咤激励することの罪を理解する。時間はかかるが、認知症の人でも「できる」ことはたくさんあるのだ。



家族交流会

認知症の現れ方は人により病気の種類により大きく異なる。ミニデイでさまざまな認知症に触れ合うことで、介護者は認知症介護の奥の深さを思う。家族が見過ごしていた微妙な体調・健康の変化に、“他人の眼”で気付くこともしばしばある。ミニデイは皆が「ゆるやかな家族」になる時間であり、介護者にとってはオン・ザ・ジョブ・トレーニングの場でもある。ミニデイ活動を体験することで交流会での話し合い(ピアカウンセリング)がより「胸に落ちる」ことになる。

ミニデイに参加できない認知症の人もいる。一部の施設入所者や在宅でも外出が困難な症状の人だ。「ペアで参加」を原則にスタートしたたけのこだが、現在は、介護者単独の参加がペア参加を上回っている。毎回、25～30人が出席し、ペア参加が5組ほど、介護者だけの出席が5～10人、ボランティアが10人前後だ。ペア参加の人も通所介護は利用しているが、「金曜日のたけのこ」だけは欠かせないスケジュールになっている。

介護卒業者も多くが会にとどまり、活動に積極的に参加している。体験を伝えることに手ごたえを感じ、看取りを終えた後の心の空白を埋める場になっている。また介護者の緊急時にはボランティアとともに「見守り留守番」にも出向く。

認知症イベント「たけのこ広場」

ミニデイ／認知症介護 家族交流の集い「たけのこ広場」は2004年にスタートした。目黒区と目黒区社協との共催で、年1回、日曜日の午後1時から4時半まで、以下の内容で開催している。



■個別相談会

認知症介護で苦闘している人たちを対象に行う1時間程度の個人面談。医師と区の保健師、包括支援センターのスタッフ(社会福祉士、主任ケアマネ等)がチームを組んで医療・介護のアセスメントを行う。

■介護者の交流会

介護者を中心にサービス事業者や一般市民など、異なった立場の人たちによる2時間ほどの交流会。ひとり一人の介護者の体験を聞き、意見や情報の交換をする。

■体験ミニデイ

介護者が相談会や交流会に参加している間の“お預かりサービス”であるとともに、「ミニデイ」とはどういうものかを体験してもらうコーナー。認知症の人へのかかわり方の実践的提案の場でもある。

■ミニフォーラム

認知症医療・介護の実践者や識者をゲストに、1時間程度の質疑を行う。ゲストスピーカーはフォーラム終了後、交流会に合流する。

■音楽会

音楽ボランティアによるジャズやクラシックなどの演奏会。普段のミニデイで行っている音楽活動も再現する。

その他の活動

例会の家族交流会の時間枠で、年5回程度、学習会や地域包括支援センターとの懇談会、自主企画認知症サポーター養成講座を行っている。

区主催の認知症サポーター養成講座や同出前講座にキャラバン・メイト資格者が講師として参加、「家族会から伝えたいこと」というコーナーでたけのこの事例を話している。

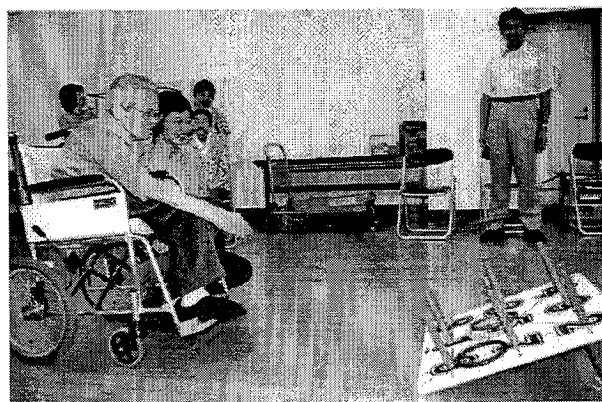


区主催の認知症サポーター養成講座



地域包括支援センターとの定例懇親会

[ミニデイ & 家族会]





ミニフォーラム



交流会



体験ミニデイ



音楽会

ミニデイ/認知症介護 家族交流の集い
第5回 たけのこ広場
「認知症を、知る。」

ミニフォーラム 認知症家族交流
認知症個別相談 ミニデイサービス

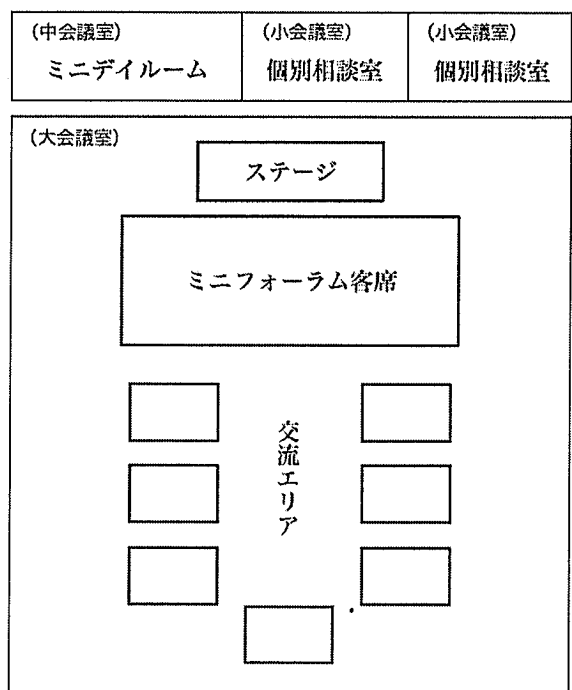
とき 2008年6月1日(日) 午後1時半開演
ところ 目黒区総合庁舎2階大会議室 (東京都目黒区)

参加無料

第1部 1時30分 **ミニフォーラム**
認知症治療 はじめの一步
講師 宮永和夫 (ゆきぐに大和病院院長)
認知症専門医
清水恵一郎 (阿部医院院長)
認知症サポート医

主催: 目黒区認知症高齢者と家族の会 たけのこ
共催: 目黒区
後援: 目黒区社会福祉協議会
問い合わせ: たけのこ・竹内 03-3719-5527 裏面へ

[たけのこ広場の基本レイアウト]



4. 活動の成果と今後の展望

草の根家族会のネットワーク

介護保険制度がスタートしたのを境に、会員が減りはじめた。通所介護などの利用が促進されたためと推察された。会員の漸減傾向にどう向き合えばいいのか。たけのこの転機であった。「よその家族会はどうしているのだろう」と思った。どんな家族会が、どこで、どんな活動をしているのだろうか？

「介護者の会ネットワーク」という存在を知った。2003年の春、NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジンの呼びかけで首都圏の10数グループが会合を持ったという。同年9月の第2回ネットワーク会議から参加した。いくつかの家族会を見学した。たけのこのように区と社会福祉協議会とのコラボレーションという例はなかった。また、ほとんどの会が介護者だけの集まりであり、本人同伴という家族会は珍しいことを知った。[若年認知症家族会 彩星の会]という、地域を超えて活動しているグループとも出会った。“若年”の情報を求め、何度も彩星の会の例会に出向いた。保健師にも情報を提供し、何組かの区民を彩星の会に連れて行った。今ではたけのこと彩星の会、両方の会員として活動している人もいる。また、彩星の会の支援者の一人が目黒区内に立ち上げた、若年専門のデイサービス「いきいき」とも密に情報交換している。[介護者の会ネットワーク]に参加して世界が広がり、たけのこの特質を見つめ直すことができた。

保健師の持つ地域ネットワーク

たけのこの活動は区の保健師に支えられてきた。認知症という厄介な病気に直面し、



ミニデイ七夕飾りづくり

右往左往している介護初心者にとって保健師は頼れる存在であり、メンバー各自が「相談できる保健師」を持っている。保健師は区内を巡回し、地域の実情に知悉している。その地域力を活かした、新たな活動を企画しようと思った。そして、[介護者の会ネットワーク]を通じて知り合った専門家に協力と参加を依頼し、2004年から体験型の認知症啓発イベント「たけのこ広場」を始めた。

「たけのこ広場」で広がる輪

ミニデイ／認知症介護 家族交流の集い
「たけのこ広場」は区民が出てきやすい「日曜の午後」に「認知症の人を同伴できるバリアフリー」の会場で開催している。たけのこのメンバーと保健師が協力して“広場”を回している。2006年の第3回からは新設の地域包括支援センターのスタッフ(保健師、社会福祉士、主任ケアマネ等)も加わった。

＜個別相談会＞では医師と保健師と包括支援センターのスタッフがチームを組んで、医療・介護の総合的なアセスメントを行う。

毎年8組前後の家族が面談に訪れる。＜交流会＞は1テーブル10人以下に設定し、専門の心理職、たけのこのメンバー、保健師・包括スタッフが進行役を務める。＜体験ミニデイ＞も同様の態勢で認知症の人を迎える。

2006年の3回目から、一般区民やサービス事業者も視野に、ゲストを招き＜ミニフォ

ーラム>を始めた。ゲストスピーカーはフォーラム終了後、交流会に参加する。

今年は保健師 9 人と地域包括支援センターのスタッフ 9 人、区と社協の職員 6 人が中核スタッフとして参加。別に、区と包括支援センターの職員 7 人が自主的に一般参加した。[介護者の会ネットワーク] からも 4 人が参加し、交流会を盛り上げてくれた。区外から訪れる人は年々増え、今年は全 132 人中 18 人が区外からの参加者だった。

表1)[たけのこ広場]の参加者推移

		第1回 (04年)	第2回 (05年)	第3回 (06年)
主催者側	たけのこ会員	26	25	29
	当日ボランティア	15	9	3
	区保健師	7	8	9
	包括スタッフ	—	7	9
	区職員	0	0	5
	社協職員	2	2	1
	相談・指導講師	7	4	4
小計		57	55	60
一般参加	一般住民	20	34	42
	介護事業者	10	9	9
	介護者のネットワーク	1	2	4
	区・関係機関職員	5	4	7
	その他	12	10	10
小計		48	59	72
合計		105	114	132
一般参加の内、区外からの参加者		3	16	18

[広場]を訪れた家族には医療と介護の今後の道筋を提案し、保健福祉サービス事務所と包括支援センターでフォローする態勢を取っている。たけのこだけでなく、保健センターの家族会や彩星の会への参加も勧めている。

[たけのこ広場]から見えてきたこと

5年続けた広場での交流の中から、介護保険制度になじめない認知症家族の姿があぶり出されてきた。「介護保険を申請していない」「介護認定は受けたがサービスを利用していない」といった人が案外多いのだ。原因の過半が認知症の本人のサービス拒否にある。

- ・介護施設に悪いイメージを持っている(あんなところには行きたくない)
- ・他人(ヘルパー)を家に入れたくない
- ・介護サービスで嫌な体験をした(二度と嫌だ)

一方で行動障害などを理由にサービス事業者から断わられるケースも少なからずある。「精神的に不安定な認知症の人を、無理なくサービスに誘導する」ための知恵(ソフト)の不足が実感される。



たけのこ広場 介護家族交流会

保健師との日常的な連携

[たけのこ広場]を通じて、保健師や包括スタッフとの“コラボ感”が深まった。今では日々の活動にも協力して取り組んでいる。問題を抱えている家族を「たけのこで慣らし運転してから介護保険サービスに誘導する」といった取り組みだ。

「介護者のそばを片時も離れない」。介護サービスを使えていない代表的なケースだ。

介護者のストレスも臨界点に近づいている。

「次のたけのこへお連れします」と保健師らから連絡が入る。そして、当日。不安な面持ちでやってくる。戸惑い、いらだっている。本人の年齢やタイプなどから「気の合いそうな」人がすばやく対応にあたる。事前の情報をもとに興味のある話題を振り、ミニデイに誘導する。介護者にも同様に“お相手”がつき、ひたすら話を聞く。たけのこの10年のノウハウが活きる。

当面の目標はデイサービス。デイという社会に復帰(参加)させることだ。デイの下見から、たけのこのメンバーが付き添う。そこには顔なじみの「ミニデイの仲間」が利用者として居る。「ここは大丈夫」という気持ちにさせることがポイントだ。最大の関門が送迎バスだ。「どこかへ連れて行かれる。二度と戻って来れない」とパニックになったケースもある。こうなると再チャレンジできるまでに数カ月かかってしまう。そのため、スタート時点では家族が送迎バスに同乗することも考える。それから少しずつ「介護者離れ」を進める。利用日を徐々に増やし、環境に慣れたらショートステイに挑戦する。この手順をあせらずに進めることができれば本人は安定し、介護者の負担は大幅に軽減する。ケアマネなどにそこまでの対応を求めるのは酷だろう。しかし、介護保険サービスを使うにはこうした「助走期間」が必要なのだ。

DVや介護うつなどで介護者だけがやって来るケースもある。たいがい保健師や訪問指導員(困難家庭を定期訪問する区独自のスタッフ)が同伴する。突然、妻のアルツハイマーに直面した夫や若年認知症の親を持った子の心的ダメージは大きい。保健師らと適宜、カンファランスを行いながら、「たけのこのおじさん」や「たけのこの母」が力になっていく。

介護なんでも文化祭

「たけのこ広場」は「介護者の会ネットワーク」に刺激を与えた。ネットワーク会議で「たけのこ広場」をモデルに、首都圏規模のイベントを開催しようということになった。アラジンと数カ所の家族会で実行委員会をつくり、アラジンを事務局に準備を進めた。

2005年11月、東京・新宿で「第1回介護なんでも文化祭」を開催。「市民の手で新しい介護文化を発信しよう」というスローガンであった。年々、規模が拡大し、昨年、浜松町の都立産業貿易センターで行った第3回では来場者は600人に達した。「介護なんでも文化祭」からは、福祉団体・グループ、企業、医療NPOなどとのネットワークの連鎖が起こり、現在はこれらのグループからも数人が実行・企画委員に加わっている。今年の文化祭は10月に上智大学四谷キャンパスで開催する。



介護なんでも文化祭の実行委員たち

100万人キャラバンから生まれた輪

目黒区は昨年からは認知症サポーター養成講座を本格展開し、現在1,292人のサポーターが誕生している。講座ではたけのこの「家族会から伝えたいこと」というコーナーが好評で、講座終了後も懇談していく人が多い。

地域に密着した出前講座も増えており、そうした中から、地域の多様なグループとの交

流が生まれている。関係者の間では、オレンジリング取得者を対象に“ブラッシュアップ講座”を開講し、認知症対応ボランティアを誕生させようという計画が話し合われている。

西部地区では保健師たちの努力で新たな「介護者の会」も誕生した。将来的にはボランティアとの“コラボ事業”をイメージしている。サービス事業所を拠点にした家族会も構想されている。目黒ローカルでもネットワークの連鎖が始まっている。

会員減をきっかけに進めたネットワーキングの結果、一時 10 家族近くに低迷した会員数も、近年は常時 20 家族のレベルで推移している。例会の見学者も増えた。区外、他県から家族会や行政の担当者などがミニデイの様子を見にくることもしばしばだ。

新たなネットワーキングへ

東京 23 区に共通の悩みだが、目黒区でも認知症に対応した介護サービス、特にグループホームや小規模多機能ホームの整備が思うように進んでいない。一方で「嚥下障害→胃ろう」という、認知症終末期に特有のケースがたけのこでも毎年、起こっている。胃ろうに対応できる老人施設は少ないし、療養病院には期待できない。「在宅でターミナル」という問題に真剣に向き合わなければならない。

「たけのこ広場」に協力してくれた医療関係者とのつながりで、目黒・近隣区エリアでの専門医や訪問診療のネットワークはそれなりにつかんでいる。[介護なんでも文化祭]で在宅医療ネットワークを進める NPO などを知りこともできた。[広場]や[文化祭]で得たネットワークの先に、まだまだ多様なネットが広がっているのだろう。認知症の介護同様、家族会も閉じこもっていては道は開

けない。目黒という井の中を、飛び出したり戻ったりしながら、たけのこ流のネットワーキングを模索していこうと思う。



活動報告(5)

活動名称	親父パーティーが地域を変える！認知症地域資源ネットワーク「NICE！藤井寺」の構築
活動要旨	「(N) 認知症になっても (I) いきいき暮らせる (C i t y) 町って (E) ええやん！」を掲げ、保健所、市、社協、地域包括支援センターが事業展開。団塊の世代が「誰でも参加し、楽しめるイベント」を開催し、認知症への理解と支援の輪を展開。
応募者	社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会 家田 葵（総務地域福祉係）、羽根 武志（地域包括支援センター）
連絡先	〒583-0035 大阪府藤井寺市北丘 1-2-8

1) 推薦理由

- ・ 日帰りアウトドアや公園イベントでは、様々な関係者が関わることで、認知症の人の理解を深める良いきっかけとなっている。団塊の世代の生きがいがいづくりと、ボランティアなどの人材発掘という成果も得られている。音楽を通じての啓発活動を行っている点も親しみやすく、発想がユニークである。
- ・ 認知症に特化した目線を強調しすぎず、自然に多くの人をまきこみ、参加者も楽しむことができる。
- ・ 親父の潜在力に着目したところが良く、地域文化をもふりいたさせる試みでもある。
- ・ 今後、団塊の世代が高齢者になっていく中で認知症の人も増えていくが、まさに団塊の世代である「親父」自身が認知症の理解を深めそれらを自分たちで広げていくことは、他の地域でもぜひ広がってほしい取り組みである。

2) 3月7日キャンペーン発表会 <インタビュー抜粋>

町永 ◆ 認知症の活動のすそ野が広がっていますね。「親父さん」というのは君たちからみてどんな世代ですか。

羽根 ◆ 頼りがいがある、いろいろアイデアも出してくれますし、かわいがってもらいました。とてもいい世代です。

家田 ◆ やりたいという思いがちゃんと形になる方法をよくわかっている、私たちがこんな風に困っているといったら、じゃあこうしようかと皆が意見をくれます。

町永 ◆ 認知症に特化しないから参加しやすいとありましたが、認知症の人や家族との関わりはどうですか。

羽根 ◆ 認知症の人は特別な人ではない。それで「なってもええやん」という声がでてきました。特別じゃない、まだ普通に話できるやん、いっしょに歌うたえるやん、笑えるやん、と特化しないところが必要だと思っています。



もちろん本人や家族へは「こういう意図でやります」とちゃんと説明し、賛同してもらって参加してもらっています。

町永 ◆ 地域の力が底上げされて、地域の人材力が高まれば、お父さんが認知症になってもだいじょうぶというだけでなく、たとえば子育ての問題とか、いろいろな問題にもその力は広がりますよね。

家田 ◆ そういってもらえたらうれしいですね(笑)。

3)3月7日キャンペーン発表会 <発表資料>

(大阪府) 藤井寺市社会福祉協議会

おやじ 親父パーティ

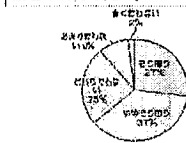


親父のチカラで地域を変える!

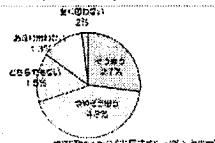
～認知症地域資源ネットワーク『NICE! 藤井寺』の構築～

アンケートからヒントを探った

Q1 身近に認知症の人がいたら、お世話をしたい。



Q2 認知症の人に、どのように接したらよいか分からない。



ビジョンの設定

- ・認知症の方とその家族を地域で支えるサポート体制づくり
- ・認知症をキーワードにした地域づくり

今後、高齢化が一層進み中で認知症は増加すると考えられる。まさに団塊の世代である『親父』自身が認知症への理解を深め広げていくことに意味がある!

“NICE! 藤井寺バンド”の誕生☆

< “NICE! 藤井寺”・“親父パーティ”・“NICE! 藤井寺バンド”の関係性 >

“NICE! 藤井寺” ⇒ 認知症地域資源ネットワーク構築事業
“認知症になっても、いきいき暮らせる町で、元えん!”

ひとつの事業として、“親父パーティ” ⇒ 団塊の世代力場のボランティア育成事業

“NICE! 藤井寺バンド” ⇒ “親父パーティ”から独立、パーティーのイベントの他に、独自にメンバーで楽し活動も広げている

尺八の音色があるのも自慢

“いきいき歌体操”とコラボ

女性メンバーも増加中

『公園を親父が変える!』イベント

地区の公園を使い地域の人が集まれるイベントを企画。住民が自然に集まり、大人が楽しく過ごせる公園になれば、子どもや認知症のかたがたも自然に外で楽しく過ごせるのではないかと音楽と簡単なレクリエーションを中心としたイベントを実施。

知名度がUP! ファンレターまでもらった!



青空の下、音楽があれば人が集まってくる! 認知症に関心がなくても、来てくれたら啓発宣伝できる!

藤井寺市ってどんな町?

人口: 66,704人 高齢者人口: 14,241人 高齢化率: 21.3%

- ・大阪府で1番面積が小さい市
- ・古墳が多くあり歴史のある町
- ・近鉄パッセローズ本拠地があった...



始まりは『NICE! 藤井寺』

- 認知症ポスター10万人キャンペーン
- 徘徊対応模擬訓練
- シンボルマーク作成
- 専門職サポート研修
- 徘徊SOSシステム
- 広報・啓発(ニュースレター等)
- 介護者家族セミナー(介護家族の会)
- 住民意識調査
- 認知症フォーラム
- (認知症理解促進キャンペーン)

(N) 認知症になっても (I) いきいき暮らせる (C) 町(CITY)って (E) ええん!

『親父パーティ』を開催☆

隠れている『親父パワー』を見つけたい!

マンションなどに歩いてチラシ配布

何かしたい!という人が集まった!

じゃあ、せっかくなし何かしようや〜☆



(石田教授のワークショップは、参加者の持つ価値観を変えた!)



親父パワーとは...

長年社会で培ってきた知識・経験・技など様々なパワー

★ (NICE! 藤井寺) バンド立ち上げのきっかけになった“ギターおじさん”

認知症高齢者日帰りアウトドアイベント!

第1回イベント[20.3.23]

「とにかく始めよう!」挑戦!

専門職のボランティア参加は大きい

皆が初めてだから逆に安心

当日のたくさんの笑顔にヤル気が出た

「もう一回やるで!!!」ヤル気が出た!

↓ (半年の準備期間をメンバーが提案、その間は修行の期間に。)

第2回イベント[20.11.15]

企画力を発揮! 日程や時間等、場所も自分達で決定

遊びメニューが充実! レクグッズも手作りに♪

なるべく省エネで自分達が出来ることをやる!

地域の老人クラブや地区の協力もあり大成功★

テーマは、“まず自分達が楽しむ”

『親父パーティ』の効果

親父パーティの成功ポイント

- ①「日帰りアウトドア」や「公園イベント」で、様々な立場の人が関わることにより、自然に認知症の理解を深めるきっかけとなっている。
- ②「親父パーティ」と名前をつけることで、男性の参加が増えている。また今までボランティア等に参加していなかった人まで取り込めている。(女性メンバーの意見として、女性はどんな名前でも来たい人は来る! とのこと)
- ③リーダーがいなくても上下関係もなく、それぞれが好きなことを気兼ねなく出来ており無理してはいから、次につながる。
- ④イベント自体の予算がゼロ。おやつ代等のお金がなければ、参加費もボランティアもお金を取るのが普通と勘違いしているから参加できるし、意見もよく出る! 参加費も自分達で決めてるで!
- ⑤認知症に悩んでいる人から、自然に多くの人を巻き込める。ボランティアの人材発掘が自然に団塊の世代の「いきいき」の意図も持つようになった!

こんなことも出来るかも?!

- ※ 認知症キャンプ(宿泊)
- ※ 高齢者の運動会
- ※ 何でもやり隊(ボランティア団体)
- ※ 歌声喫茶
- ※ 秘伝の漬物講座
- ※ “親父”の人生相談所(若者向け)
- ※ (高齢者が、秘伝の味を伝授)

4) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

国の認知症地域資源ネットワーク構築モデル事業を受託した、大阪府藤井寺保健所、藤井寺市、藤井寺市社会福祉協議会（以下、社協）・地域包括支援センターでは、「(N) 認知症になっても (I) いきいき暮らせる (City) 町って (E) ええやん！」《NICE！藤井寺》をキャッチフレーズに、さまざまな事業を展開してきました。その一つとして、社協が行ってきた「親父パーティー」の取り組みは、《NICE！藤井寺》の知名度をあげ、認知症の方への理解啓発をすすめる起爆剤となりました。

面積が小さく、旧村地域も多く残る藤井寺市では、地域住民同士の繋がりが強く、市全体としての行事や取り組みが当たり前のように行われています。その中で、自治会、福祉委員会、老人クラブなど様々な地域団体組織が機能し、その中で活躍する住民が多く存在することは、大きな強みです。

「親父パーティー」は、退職後第2の人生として地域に戻ってくる団塊の世代に着目し「地域の中で何が出来るか？！」というテーマのもとワークショップ形式で開催しました。地域は親父のチカラを必要としている。でも実際どんなチカラを地域は求めているのか？親父達は地域に対して何が出来るのか？！そんな事を親父だけでなくオカン（女性）も集まって考える場となりました。第2の人生においてこれを地域にどう還元するのか？これこそが親父パーティーの大きなテーマとなりました。認知症というキーワードをメンバーが意識し、さらに自分たちの認知症予防も大きな機能であると、積極的な取り組みとして発展してきました。

そこで、注目すべきは、第1回親父パーティーで結成された“親父”による『NICE！藤井寺バンド』の存在です。音楽をテーマに認知症啓発を行い、市内施設への定期コンサートや野外ライブを通してファンを獲得し、地域高齢者のスターになりました。基本精神を“音楽を楽しもう！どんな楽器でも参加OK！自分も楽しみ認知症予防をしながら認知症高齢者にも懐かしい歌を通して笑って歌ってもらおう！”と活動しています。

「親父パーティー」初企画の認知症高齢者の日帰りアウトドアは、認知症とその家族を対象としたイベントであり、普段なかなか家から出ない、また出てもデイサービスや病院など決まったところへの外出にとどまり、野外活動の機会が極端に少ないであろう方のために、認知症高齢者キャンプの実例を参考に計画しました。親父パーティーのメンバーに加え、ボランティアスタッフとして市内の専門職（ケアマネジャーや介護スタッフ）の協力もあり、大成功に終わることができました。

イベントの送迎時、不安そうな顔をされていた対象者が、帰りの車内では興奮して笑顔いっぱいだったことは印象的でした。

その後、親父パーティーは新しい事にチャレンジ！これが「公園を親父が変える！」イベントです。物騒な世の中で、公園も安全とは言えない…でも大人が楽しく過ごせる公園になれば、子どもや認知症の高齢者も自然に外で楽しく過ごせるのではないかと考え、市内いろいろな地区の公園で音楽と簡単なレクリエーションを中心としたイベントを行おうじゃないかと、親父パーティーのメンバーが主催者の意識をもって、3箇所の公園での実績を残しています。

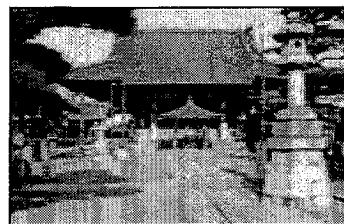
2. 地域の紹介

① 基本データ＜平成20年3月31日現在＞

人口	66,646人
高齢者数	14,053人（高齢化率 21.1%）
認知症の人の人数	1,046人

（要介護認定調査結果「認知症高齢者日常生活自立度Ⅱ以上」）

藤井寺市は大阪平野の南東部に位置し、大阪都市圏にあって、人口密度が高い小規模都市である。高齢化率は、21.1%。平成26年には、26.1%と推計されている。他の市町村同様、高齢化の加速に伴い認知症の方を地域で支える体制の整備は近々の課題であるといえる。全国の市の中で6番目に面積が小さい大阪のベッドタウンである当市は、大小の古墳が密集する古市古墳群や、西国三十三箇所第5番札所の葛井寺の門前町として知られる。かつてはプロ野球大阪近鉄バファローズの本拠地・藤井寺球場があったことでも知られている。また4～6世紀頃、古市古墳群に古墳が造営されるなどでも有名な市であり、代表的なものとしては允恭天皇陵や仲哀天皇陵があげられる。さらには古墳建造に用いられた修羅が発掘された事でも知られるよう古代から栄えた地域である。1978年3月に古市古墳群の三ツ塚古墳の周濠から大小2つの修羅が出土し、マスコミで大きく報じられ、現地説明会には12,000人余りの人々が見学に訪れた。



この発掘は大きな反響を呼び、朝日新聞社や考古学などの専門家によって、市内の大和川河川敷で、復元した修羅に巨石を乗せて牽引する実証実験が行われたほどである。

② 地域の特色

藤井寺市地域福祉活動計画作成にあたって実施した市内を7ブロックに分けた住民懇談会のアンケートにおいて「地区のよいこと」を質問したところ、全てのブロックにおいて「町会・自治会」の活動区分における回答が最も多いという結果が出た。町会・自治会の行事や活動が活発であり、それらに対する団結があるという認識が高かった。また社協のバックアップのもと、民生委員や福祉委員による一人暮らし高齢者等の個別訪問をする「見守り・声かけ訪問活動」が定着しているなど比較的住民のつながりが残っている地域といえる。

一方で、認知症に関するインフォーマル資源（例えば介護家族の会、ボランティア組織等）や認知症の啓発の実績などはほとんどなく、資源のネットワークを構築する以前に地域の担い手となるマンパワーの育成や資源の創出も必要であると考えられた。

3. 活動の内容

●「親父パーティー」のはじまり

より多くの地域住民に対し、認知症の理解をすすめ、一人ひとりが「認知症になってもいきいき暮らせる町」を作り上げる一員として協力できるまちを目指すには、当市の強みとして大きな機能を果たしているが、役員の高齢化や固定化、さらには重複化といった問題を抱えている既存組織のチカラだけではなく、新たな住民のチカラを組み合わせることが不可欠だと考えた。

そこで着目したのは、「団塊の世代」という人材資源の発掘であった。地域貢献への意識が高く、自発的に何が必要かを考え行動できる人材を求めて、「親父パーティー」と称する、「地域に対して何ができるのか」を考えるワークショップを開催した。

ここで期待されたのは『親父パワー』。すなわち、長年社会で培ってきた知識・経験・技など様々なパワーである。

日時	平成20年12月15日（土）14時～17時
テーマ	親父パーティー「親父パワーを地域のチカラに！！」
場所	藤井寺市立福祉会館
助言者	桃山学院大学 石田易司教授
参加者	22名

写真①（石田教授のワークショップは、参加者の持つ価値観を変えるほどのインパクト）



写真②（NICE！藤井寺バンド立ち上げのきっかけになった“ギターおじさん”）



アンケートでは「改めて老後を考える機会となった」という声とともに、趣味や、現在活動していること（ギター、登下校の見守りボランティア、ハイキングなど）から、「何か手伝えることをやりたい」という潜在的な想いを読み取ることができた。

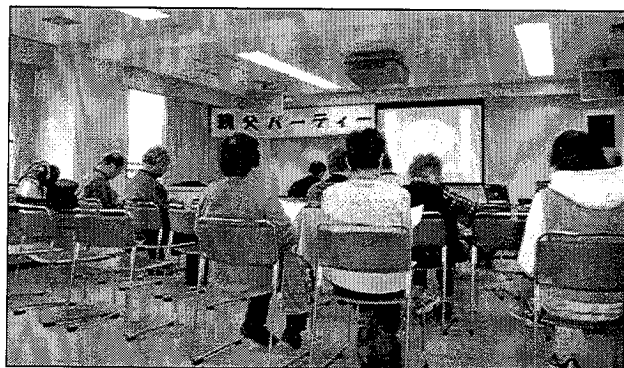
●日帰りアウトドアイベントの開催

「親父パーティー」の参加者の想いを形にするきっかけとして、《NICE! 藤井寺》の取り組みと連動させたイベントへの協力を呼びかけた。サブテーマを「はじめの一步」とし、具体的なイベントの企画と運営を参加者に任せ、自分たちが創り上げたイベントである、と感じてもらうことを主眼とした。

「第2回親父パーティー」の開催にあたり、認知症サポーター養成講座を受講した方にも案内し、企画への協力を呼びかけた。

日時	平成20年1月26日（土）14時～16時
企画名	第2回親父パーティー「はじめの一步」
場所	藤井寺市立福祉会館
内容	認知症高齢者の日帰りアウトドアを行うにあたって、仲間づくり・イメージづくり
参加者	19名

写真（認知症高齢者キャンプの過去の映像を参考にイメージづくりから始めました。）

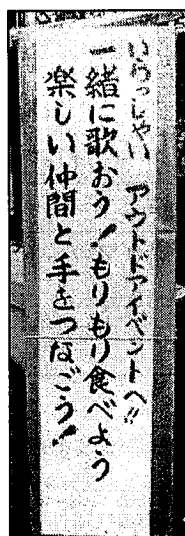


「第2回親父パーティー」を含め、アウトドアの当日まで3回の「親父パーティー」を開いた。現役で仕事をしながら、参加を続けているメンバーもあり、開催日時を夜間とした。社協としては、開催場所の確保、予算、定員などの大枠を提示したのみで、役割分担、食事やレクリエーションのメニューの検討、準備の段取りなどについては、参加者の意見を中心に企画がすすめられ、回を増すごとに参加者の主体性が高いものとなっていた。

第3回	平成20年2月8日（金）18時30分～20時
第4回	平成20年3月12日（水）18時30分～20時
場所	藤井寺市立福祉会館
内容	認知症高齢者の日帰りアウトドアの企画

平成20年3月23日（日）、「認知症とその家族と高齢者日帰りアウトドア」を実施した。認知症高齢者のキャンプ経験者である桃山学院大学石田易司教授の助言をもらいながら、住民ボランティアが主体的な運営を行って行われたものだった。内容、準備、運営に関して住民主体の取り組みを支援していく中で、自分達だけでなく、より多くの人が関わる必要性が感じられるようになり、多くのボランティア参加者の協力を得た。「親父パーティー」の参加者だけでなく、近隣大学の学生、青少年リーダー協議会、市内在勤の専門職（ケアマネージャーや、介護スタッフ）がボランティアとして参加し、認知症の方12名の参加を含め、総勢70名の大きなイベントとなった。また、開催場所についても市内にある障害者施設「賀光寮」の敷地を借りることができ、《NICE！藤井寺》について知ってもらう良い機会となった。

写真①（NICE！藤井寺バンドの活躍）



写真②

親父による手作りの看板

写真③参加者全員による紙ヒコーキ競争



このイベントでは、参加した高齢者から多くの笑顔をもらい、「毎週でも開催してほしい」という感想など、親父パーティーのメンバーをはじめ、ボランティア参加者の達成感は大きいものであった。認知症高齢者の方への付き添いをした親父パーティーの参加者による「当日までに準備してきた認知症に関する知識や心配ごとは何の役にも立たなかった。ただ、普通に接すれば良かったただけだから」という感想は、認知症の方と自然にふれあう理解促進の大きな役割を担ったことを端的に示していると思われる。

● “公園イベント” スタートによる「親父パーティー」の継続

「日帰りアウトドア」が成功をおさめた後、「親父パーティー」は、社協が意図しただけではなく、「これっきりになるのは、もったいない」というメンバーの後押しもあって、継続が決まった。

日帰りアウトドアのような大きなイベントの継続は、困難だと判断し、NICE！藤井寺バンドを中心に、地区の公園を使って、地域の人が集まる企画をしようということになった。子どもも高齢者も自然に集まり、大人が楽しく過ごせる公園になれば、子どもや認知症の高齢者も自然に外で楽しく過ごせるのではないかと音楽と簡単なレクリエーションを中心としたイベントが市内3ヶ所で実施された（平成20年9月30日現在）。

- ・平成20年6月 5日（木）藤ヶ丘さくら公園
- ・平成20年7月30日（水）道明寺楯塚古墳公園
- ・平成20年9月25日（木）小山西住宅公園



小山西での笑顔・笑顔♪ →

← 道明寺での笑顔♪



イベントでは参加者が100名を越えた時もあり、市民にも知名度が上がってきた。「次はうちの地区で!」「また開催して!」と親父パーティーに寄せられる期待も大きくなっている。

● 既存地域組織・団体との協力、活動の広がり

公園イベントの実施にあたっては、公園が存する地区の協力を得る必要があった。地域住民に対する当市の強みである地区の力も活かすことができる良い機会と捉え、イベントの広報、協力依頼を積極的に行った。公園イベントを行う際には、《NICE！藤井寺》の取り組みを案内する時間を設け、異なる目的で参加された住民にも啓発を行う機会となった。

実際に、2回目の公園を行った三ツ山地区では、区長との関係が構築され、地区での認知症サポーター養成講座の開催につながっている。

また、活動を繰り返していく中で、NICE！藤井寺バンドだけではなく、地域で活動しているボランティアグループとも協力できるのではないかと、「いきいき歌体操藤井寺グループ」も一緒に参加するようになった。演奏に合わせて歌うだけではなく、一緒に体を動かすというメニューが加わることとなり、参加者からも好評であった。「いきいき歌体操藤井寺グループ」の方も地域でのイベントに参加することを喜び、既存の団体と新たな資源が繋がり、地域のボランティアグループの活躍の一助も担うこととなった。

4. 活動の成果と今後の展望

藤井寺を変えた3つの成果

①人材の発掘、住民の主体性、地域の可能性

今回の一番の成果は人材の発掘である。市内にどれだけのチカラ（親父パワー）があるのか当初は不明であったが、担当者がチラシ配りからはじめて見えてきた地域のチカラは想像していたものとは大きく違っていた。今まで慣習的に社協主導で行なわれてきた様々なイベントであったが、今回の「親父パーティー」イベントを通して地域・住民・対象者が自ら企画・実施を行う事の重要性、また実行力の凄さには驚いた。もちろん裏方としては社協も動いていたのだが、主体をうつす事で生まれる責任感や様々なアイデアに今回の一番の成果を感じた。

また退職後、ボランティア等の活動に興味を持ち活動したいと希望する団塊の世代が多いことにも驚いた。今後も継続してこのような世代から人材の発掘を行う事は、地域福祉においては最重要課題であると考えられる。現在ある自治会・地区など区長を中心とした縦社会コミュニティに、親父パーティーのような横社会コミュニティが入り込むことで、その場のそのニーズに対応できるような新しいコミュニティが作られている途中であり、今後に期待である。

②ボランティアグループの組織化・活性化

「NICE！藤井寺バンド」は、母体である「親父パーティー」より独立し、ボランティア団体として組織化され、より積極的な活動へとつながっている。《NICE！藤井寺》の取り組みである“認知症になってもいきいき暮らせる町っていいやん！”というテーマを理解し、今後も社協の事業に対し、積極的な関わりが期待できるとともに、他団体とのコラボレーションにおいては、好影響が見える。公園イベントでは、いきいき歌体操藤井寺グループとのコラボレーションをしたり、おはなし読み聞かせを行うさあくるおはなしころりと、一緒に高齢者福祉施設へ行ったり、音楽に取り組むその他ボランティア団体と一緒に演奏を行ったり、と、活動が広がっている。音楽がテーマという事で、他の団体とコラボレーションしやすかったという経緯もあるのだろうが、自分の団体の活動だけに興味を持つのではなく、他の団体にも興味を持ち、テーマや想いが一緒なら、一緒にやろう！というシンプルだが難しい事が徐々にでき始めている。「NICE！藤井寺バンド」の演奏に合わせ「いきいき歌体操」が踊る。これによって観客は歌いながら踊れるのである。今後も市内の各ボランティア団体が活性化していく起爆剤に「NICE！藤井寺バンド」・「親父パーティー」はなっていくと考えられる。

③活動の継続性（予算0円でもできた）

イベントなどの活動において継続性は重要である。しかし予算が取れないことはよくある事である。しかし、これまで述べてきたアウトドアイベント、公園イベントは、予算0円で実施してきた。それは、企画をするにあたって危惧していた「予算がなくなったらなくなった」ということにはしたくない、という社協の想いを、親父パーティーのメンバー自身が、最初から理解してくれたからである。

「親父パーティー」という仕掛けをもとに、団塊の世代をはじめとする“親父”さんたち住民ボランティア、「NICE！藤井寺バンド」が積極的な働きをしてくれたことにより、認知症地域資源ネットワーク構築のための事業は大きく展開していった。認知症に関する理解をすすめ、地域に《NICE！藤井寺》の取り組みが浸透することとなった。

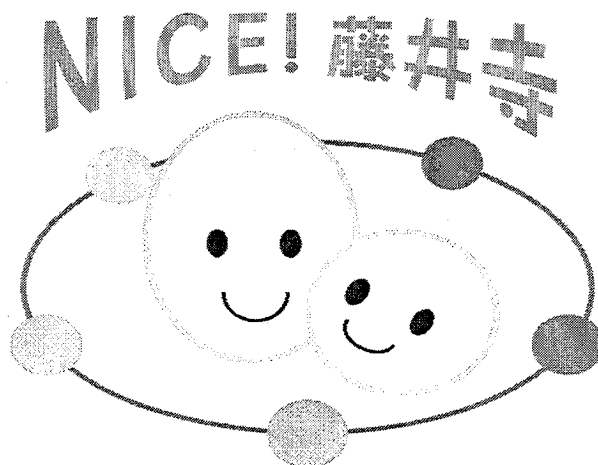
半年以上にわたり、続けてきた活動は、社協が主導ではなく、親父パーティーの参加者の主体的な意識によるところがとても大きかった。社協がすることを手伝う、という意識は、まだ残っているが、「親父パーティー」の一員として、長期にわたって関わっている方との関係は、とても大きな財産である。

今後、知名度があがってきたこの活動を、より地域に密着した形で展開していくことを、親父パーティーのメンバーとともに模索していきたいと思っている。また11月には、2度目のアウトドアイベントを企画しており、これからの「親父パーティー」の動きを社協として、さらに継続的に支援していきたいと思っている。

また、忘れてはいけない成果として、地域住民への認知症啓発効果である。「親父パーティー」という事業を通して認知症になってもいきいき暮らせる町を意識する事によって、認知症に対する住民の意識が確実に変化している。認知症でも大丈夫やん！歌を歌えば普通に笑ってるやん！それだけでも大きな成果だが、地域や家族などで困ったことがあれば適切な相談機関（地域包括支援センター等）につなげるという事が出来始めている。イベントに参加する事で認知症に興味を持ち、認知症サポーター養成講座の開催を要請する地域や、自分の持ち物に啓発用のシールを貼ったりオレヅリングをはめる住民も増えてきた。

認知症というテーマを、あえて一番に打ち出さず、誰もが参加できて誰もが楽しめるイベントをメンバーが企画する事で、認知症でも参加できて楽しめるイベントを実施でき、認知症は特別ではないという事が無意識にメンバーに広がっていることも、社協が今後もまちづくりに参加していく中で意識していく必要があると感じた。

《NICE！藤井寺》「(N) 認知症になっても (I) いきいき暮らせる (City) 町って (E) ええやん！」を合言葉に認知症でも障害者でも、みんなが住みやすいまちづくりを今後もどんどん進めていきたい。



活動報告(6)

活動名称	であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援「あんしんメイト」
活動要旨	家族の会から生まれたNPO法人が市と協働で行う認知症高齢者見守り支援事業にて「あんしんメイト」を開始。地域包括支援センターが窓口となり、認知症の方の性格・趣味・居住地域などを総合的に考慮した肌理細やかなコーディネートを実施。
応募者	NPO法人 認知症サポートわかやま
連絡先	〒640-8144 和歌山県和歌山市四番丁 52 ハラダビル2階

1)推薦理由

- ・ 認知症の人を支えるには介護保険のサービスだけではなく、「あんしんメイト」は認知症の理解から具体的支援に結びつける取り組みとして本人・家族を直接的に支える大切な活動を展開している。相談活動を大切に、当事者のニーズに基づいた「見守り支援」のシステム化が図られている点が素晴らしい。
- ・ 家族の会の活動の延長として、本人や家族の不安、負担の解消軽減に何が必要であり、どうしたら実践できるのかに対して、一つひとつを見事に活動につなげている。
- ・ 認知症本人を対等にみる起点も大切であり、「あんしんメイト」の活動は地域福祉全体を底上げしていく可能性を持っている。行政の関わり方の観点からも、市民・ボランティア・NPOと協働するあり方は参考となる。介護経験者のつながりや活躍の場になっている点も他の地域に広まってほしい。

2)3月7日キャンペーン発表会 <インタビュー抜粋>

町永◆あんしんメイトは家族支援の活動ですね。逆にいうと家族支援というのはまだ足りないのでしょうか。

林◆電話相談はしてくださるのですが、つらいなどは敷居が高いと感じる方もおられます。外へ出て来られない方へはこちらから伺いニーズをきかせてもらうことを始めたらとてもいい結果がでています。続けていきたいと思えます。

町永◆あんしんメイトは介護体験のある人ですか。

林◆一応介護体験のある人としていますが、特に必要ないかもしれないと私は思っています。ただ、介護体験のある人のほうがご家族は安心されることもあります。あんしんメイトには今まで経験をしたことを活かして活動いただいています。



町永◆あんしんメイトは、これからますます必要になってくると思いますが、十分足りていますか。

林◆利用する人が増えてきています。財源の関係もありますし、今の状態では大変だという声もあがっています。

町永◆あんしんメイトの活動が広がっていけば、地域づくりとしての広がりもありますよね。

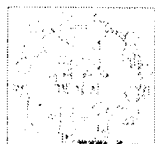
林◆そうですね。

3)3月7日キャンペーン発表会 <発表資料>

出会う・ふれ合う・分かち合う

認知症の人の見守り支援

あんしんメイト



介護家族の経験から
誰もが安心して暮らせる社会に

NPO法人 認知症サポートわかやま



認知症サポートわかやま 相談支援活動内容

1. わかやま認知症なんでも電話相談
2. 相談交流会 つどい
3. 認知症の人と家族の思いを話すピア・カウンセリング
4. であう・ふれあう・わかちあう認知症の人の見守り支援 あんしんメイト
5. みんなで一緒に楽しみましょう ほっとルーム
6. 認知症支援者のためのグループワーク
7. 認知症サポーター養成講座
8. 講演会・認知症疑似体験等

介護家族向けパンフレット



あんしんメイト誕生の経緯

◇家族の声

「ずっと一緒にいるのは疲れる」「急な用事の時見守って欲しい」



◇平成18年

介護保険地域支援事業の中の家族支援事業として和歌山市と協働して行う

◇家族介護を終えた人、仕事をリタイアした人達の生きがいの場として

あんしんメイトの理念

◇地域で共に生きる人間としての視点

◇お世話する・されるではなく 対等の関係の友人として

活動の指針

◇家族と本人の総合的な支援

◇メイトの社会参加と生きがいづくり

◇関係機関と連携して活動の成果を広げていく

あんしんメイト活動内容

◇目的 認知症高齢者と家族の精神的負担 不安の解消・軽減

◇利用者 65歳以上の認知症高齢者

◇申請者 和歌山市在住の家族

◇利用場所 自宅又は支援ルーム

◇利用料 週3時間まで無料

◇利用方法 地域包括支援センターへ申し込み、市役所(高齢者福祉課)にて決定されたら、その後利用したいときに直接、認知症サポート和歌山に連絡する。

※認知症の本人が若年の場合や一人暮らしの場合等についてもケースバイケースで検討して対応する



あんしんメイト養成講座

◇介護経験者を対象に2日間の講習を行う

◇学習内容

医療、ケア、制度、専門機関、権利擁護
個人情報保護、体験発表等



定例勉強会

◇毎月17日に開催

◇ミーティング、
内外講師による勉強会



認知症サポートわかやまサロン

◇ビデオ・DVDの活用 ◇書籍の貸出

あんしんメイト利用家族の声

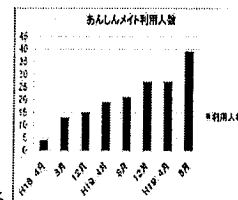
◇家族とは違った会話を楽しんでいる様子

◇明るい方が来られ歌を歌ってくれるので、ひとりでも歌うようになった

◇妄想がなくなってきた

◇たまにお会いしたときは励まされ、今の状態を肯定的に捉えて下さるので明るい気持ちになれる

◇家族の自由な時間が与えられ感謝



今後の展望

◇家族対象の訪問カウンセリング等への支援を行う

◇県内各地で、家族の相談交流の場としての「つどい」を開催し、連携して見守り支援の輪を広げていく

4) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

【活動の要約】

「あんしんメイト」は、見守りが必要な認知症の人を家族が留守の時や家族が休息したい時に支援員を派遣し見守りを行う活動である。認知症高齢者とその家族の精神的負担や不安を解消・軽減することを目的として和歌山市内に居住する認知症高齢者の見守り支援体制を構築するために、和歌山市とNPO法人認知症サポートわかやまが協働で行う認知症高齢者見守り支援事業として、平成18年に和歌山市より委託され3年目を迎えている。「あんしんメイト」の依頼の窓口は市内8か所の地域包括支援センターで、訪問調査のうえ市が認めた認知症高齢者の家族が利用することができる。

「あんしんメイト」は、地域で共に生きる人間としての視点を理念としており、認知症の人に対しては、人間としての対等の関係を心がけている。認知症の人と支援するメイトの性格・趣味・居住地域などを総合的に考慮した派遣コーディネイトを行い、家族の状況に合わせて居宅を訪問し、認知症の人とメイトの付き合いが始まる。家族の都合や場合によっては支援ルームでの支援も行っている。

「あんしんメイト」の派遣に先立って、認知症の疾患や認知症の人との接し方など、認知症の人を地域で支えるために必要な知識や技能を身につけるための「あんしんメイト養成講座」が開催され、養成講座のカリキュラムを修了した者が、「あんしんメイト」として登録できる。「あんしんメイト」の活動は家庭や職場で認知症の人を介護した経験のある人が、今までの経験を活かして社会貢献できる場でもあり、認知症の人を看取り終えた家族の生きがいづくりの場ともなっている。

家族の負担軽減だけでなく、「あんしんメイト」を利用するようになって、本人の状態に良い変化がみられることも多く、認知症の本人の周辺症状が少なくなるなどの成果が表れてきている。介護保険サービスを利用している利用者のサービス担当者会議に出席することも多い。担当のケアマネジャーから他の家族に「あんしんメイト」が紹介されるケースも増えている。

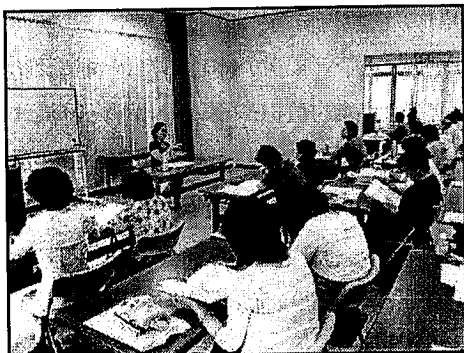
また、認知症高齢者見守り支援事業では「あんしんメイト」の派遣と並行して毎月認知症の人と介護する家族を対象に、グループカウンセリングのかたちで「ピアカウンセリングのつどい」を行い、手作りの食事を提供し家庭的な雰囲気の中で、本人グループと家族グループが何でも話せる場所を提供し、精神的な負担や不安を解消させ前向きな気持ちを持てるよう支援している。併せて、認知症サポートわかやまでは「わかやま認知症なんでも電話相談」を受け付けており、随時家族の個別の相談にも応じている。

メイト達は、本人や家族の様子に一喜一憂しつつも、よりよい支援を目指し毎月のミーティングと学習会を重ね、試行錯誤しながら着実にスキルアップしてきている。

「あんしんメイト」の活動は県内外からも注目されており、介護家族や関係機関から、問い合わせ・希望が多く寄せられていることから認知症の人が地域で安心して暮らせる社会への支援として、行政と協働した力強い町づくりキャンペーンといえよう。

あんしんメイト養成講座

H20 年度の養成講座 6 月 21・22 日 和歌山市コミュニティーセンターで 31 人が修了



講座受講

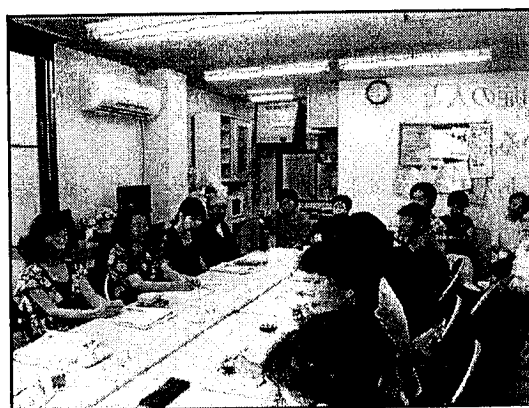


修了証授与

あんしんメイト定例勉強会



勉強会「介護認定と予防について」
地域包括の職員（写真中央）を招いて



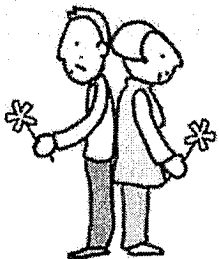
ミーティング

サロンの掲示板には研修会など県内外の催しの案内を掲示している。常に新しい情報を提供して、メイトが関心のある催しに参加し、個々に研鑽できるように支援している。サロンでは、認知症関連の書籍の貸し出しも行っており、ビデオ・DVDを鑑賞することもできる。サロンでは、毎月介護家族の相談交流会の「つどい」が開催され、また毎月一般市民を対象に「認知症サポーター養成講座」を開催しており、キャラバンメイトの資格を持つメイトやスタッフが交代で講師を務めている。

介護家族向けパンフレット 介護家族向けパンフレット「家族と私のために」を発行、役立つ情報を提供しています。

家族と私のために

認知症の家族が困る時のためのパンフレット



電話相談 事務局では電話相談「わかやま認知症なんでも電話相談」を受け付け家族の個別相談にも応じています。

わかやま 認知症なんでも電話相談

0120-969-487
073-423-5771

10:00~15:00 受付
土日祝を除く 続毎日

2. 地域の紹介

和歌山市は、大阪湾の海上交通と紀ノ川の河川交通の結節点に位置し、古来より人・物・情報が行き交う交流拠点として栄えてきた。戦後、鉄鋼・化学などの重化学工業が飛躍的に発展してきたが、昭和 50 年代以降は産業構造の変化に充分対応できず、産業の低迷が続いている。それ故、本市を取り巻く社会経済環境は大きな変革期にあたり、地域コミュニティ行政システムの再構築などが緊急の課題である。このような状況の中、市民は「水と緑と歴史のまち 気くばり 元気わかやま市」のまちづくりを進めている。

【和歌山県における高齢化の状況】

◎ 和歌山県

総人口	1,045,973 人
65 歳以上	264,111 人
率	25.3%

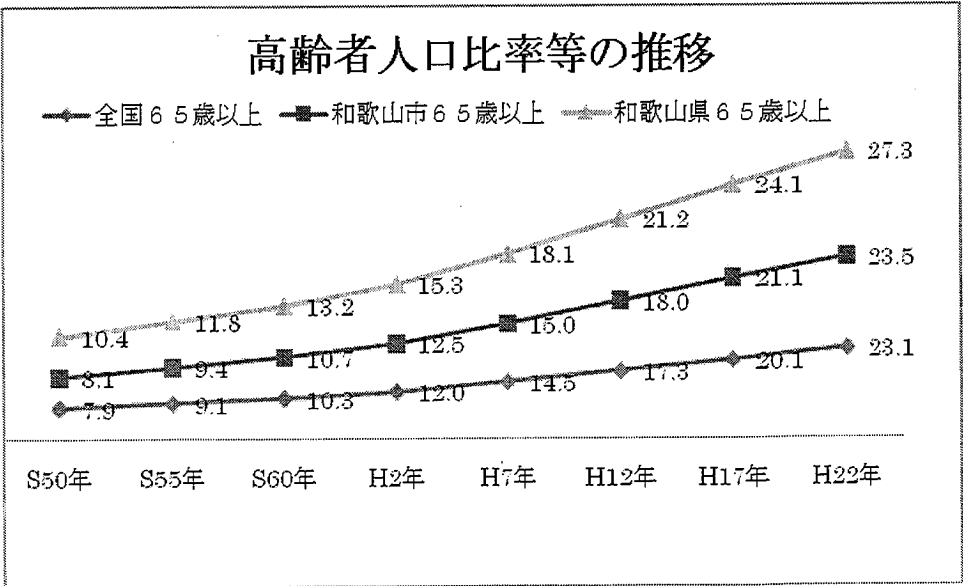
(H20 年度和歌山県福祉保健部福祉保健政策局長寿社会課より)

◎和歌山市

総人口	382,019 人
65 歳以上	89,841 人
率	23.5%

(H20 年度和歌山市健康福祉局社会福祉部高齢者福祉課より)

和歌山市の高齢化率はH20 年度は 23.5%と全国平均より 1.8%上回っている。あんしんメイトが始まった H18 年度は 21.9%、そして昨年は 22.7%である。いずれも全国平均を上回る高齢化率である。



※和歌山市の H22 年度は H20 年度の数字です。

◎和歌山市の概況

和歌山市の高齢化率の推移
単位：人、％

	総人口	65歳以上人口	65歳～74歳		75歳以上		高齢化率
			人数	比率	人数	比率	
平成7年	394,838	59,094	36,129	61.1	22,965	38.9	15.0
平成12年	393,823	70,697	42,564	60.2	28,133	39.8	18.0
平成17年	386,559	81,716	45,546	55.7	36,170	44.3	21.1
平成20年	382,019	89,841	48,703	54.2	41,138	45.8	23.5

※平成7年は4月1日現在の国勢調査基準人口、平成12年以降は3月31日現在の住民基本台帳に基づく

65歳以上の認知症高齢者数（将来推計値）

	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	平成32年
推計数 （万人）	101.0	125.9	155.8	188.8	225.6	262.2	291.6
65歳以上人口 比（％）	6.75	6.91	7.18	7.63	8.13	8.35	8.91

※ 昭和60年の認知症出現率と平成4年9月の厚生省人口問題研究所の人口将来推計に基づく推計（「我が国の精神保健福祉」平成13年度版より）

【和歌山市の市民活動と協働を取り巻く現状】

特定非営利活動促進法に基づき設立された和歌山市を拠点とするNPO法人は平成19年9月末で132団体ある。また、その活動内容は多岐にわたり、保健・医療又は、福祉の増進を図る活動は81団体、そのほかにも、まちづくりの推進を図る活動、子供の健全育成を図る活動など、あらゆる分野で多くの団体による活動が展開されている。

和歌山市の課題は大学・高等教育研究機関や、雇用先の不足による若者の流出、地域経済の衰退、少子高齢化や人口減少による地域の担い手の減少、市財政構造の悪化のほか、行政への無関心・不信任、地域のつながり力の希薄化などがあり、これらの課題を一つひとつ解決していくにより、市民力を基盤とした先進的な街づくりが求められている。

市民活動と協働をこれからの和歌山市を元気にするための大きな社会資源として位置づけ、推進し「活力ある持続可能なわかやま」を目指すことを重要とし、市民グループと行政の協働の指針を作るための委員会が平成19年に設置され、豊かな協働を実現させ、さまざまな社会問題を解決させ、人材を生かし安心して暮らせるコミュニティの形成を目指している。

3. 活動の内容

【団体の活動紹介】

「NPO法人認知症サポートわかやま」は和歌山県内で任意団体として活動していた「呆け老人を抱える家族の会（現 認知症の人と家族の会）和歌山県支部」の活動の延長で、行政と協働し、より活動を充実させるために、平成 17 年に法人格を取得した団体であり「認知症の人と家族の会和歌山県支部」と連携して活動している。和歌山市内に活動の拠点を置き、県内全域で活動している。現在の会員数は約 130 人

「呆け老人を抱える家族の会和歌山県支部」から企画提案し、平成 15 年に和歌山県委託事業として始めた週に 1 度の「わかやま痴呆なんでも電話相談」は現在「わかやま認知症なんでも相談」として「NPO法人認知症サポートわかやま」に引き継がれ、土日祝日を除く毎日行っている。また、電話相談の相談者からの要望を受けて平成 16 年に和歌山県委託事業として同じく企画提案して始めた「若年・初期痴呆の本人と家族のためのピアカウンセリングのつどい」は現在和歌山市委託事業の「ピアカウンセリングのつどい」として「NPO法人認知症サポートわかやま」が受け継ぎ継続して実施している。「本人と一緒に出かけられる場所がない」という家族の声に応えて、カラオケやゲームを交えて、家族と一緒に楽しめる場として「ほっとルーム」の開催も行っている。

また、相談交流会を目的とした「つどい」も、県や自治体の委託事業や独自事業として他団体とも連携しながら、現在県内 4 地域で定例開催、また、定例に向けての単発の開催も毎年数ヶ所の地域で行っている。

平成 20 年度には和歌山県と協働して、介護家族向けパンフレット「家族と私のために」を発行し、認知症への家族の理解と知識、認知症の人が混乱したり不安になったりしないような接し方のコツを示し、介護家族のサポートを行っている。

他にも一般市民に向けての講演会やシンポジウムの開催、毎月の認知症サポーター養成講座など、認知症の啓発活動にも力を入れている。

それらの活動をベースに「あんしんメイト」の活動に取り組み、いろいろな角度から認知症の人と家族を支援する町づくりを進めている。

【あんしんメイト誕生の経緯】

電話相談やつどいの家族の声から「ずっと一緒にいるのは疲れる・・・」「少しの間自宅で本人をみてほしいが誰彼に頼めるわけでもなく・・・」「急な用事などの時、本人を一人にしておくことができない・・・」との要望が相次いでいた。当NPOの中心スタッフの大部分は現在又は過去に認知症の家族を介護した経験があり、認知症の人の見守り支援の必要は身をもって痛感していたが当NPOだけの力ではどうにもならず、和歌山市にも訴えてきたが財政事情もあり、なかなか実現には至らなかった。やっと平成 18 年に介護保険の地域支援事業の位置づけで家族支援事業として実現可能と市の担当者から話があり、市との協働での実施が実現する運びとなった。

【あんしんメイトの理念】

「あんしんメイト」は、地域で共に生きる人間としての視点を理念としており、認知症の人に対しては、メイトとしての対等の関係を重んじている。「あんしんメイト」なる名称は、お世話する、されるの関係ではなく、対等の関係の友人としての当会員の発案である。「あんしんメイト」は認知症の人への支援を特別なことと捉えず、地域の日常の中で自然な形で行いたいということを心が

けている。それぞれのメイトが、担当する認知症の本人との関係においてのコミュニケーションを大切に、お互いによりよい時間を共有できるように努めており、園芸や、手芸、ちぎり絵など、それぞれユニークなものへと発展していくことももある。認知症の本人からのやさしい気づかいや言葉に、メイトが癒される思いを持つこともあり、さまざまなハプニングもあるが、共に過ごす時間を経験する中で、メイト自身の気づきとなることも多い。

【あんしんメイトの実際】

原則として派遣されるのは1名であるが状況によっては2名の派遣となることもある。原則として介護は行わないが、時と場合によっては必要に応じて行うこともある。有償での活動であり、それぞれ「あんしんメイト」としての責任を持った活動ができるように個人情報の保護には細心の注意を払い全員から誓約書をもっている。もしもの時に備えて傷害保険にも加入している。

市から認められた利用者については、家族と事務局で相談のうえ、定期的、あるいは随時の利用となり、週3時間までは無料で利用できる。週3時間以上の利用については事前の協議のうえ決定する。利用対象者は市内に居住する原則65歳以上の認知症高齢者で、「認知症老人の自立度判定基準」のⅡaランク以上とする。派遣時間帯は原則8時から18時までとしているが、メイトの都合がつけば、それ以外の時間にも応じている。派遣場所は自宅または支援ルームである。支援ルームは事務局の近くに位置し、かつて姑を看取り終えたスタッフが家族の介護を行っていた家を提供してくれており、「ピアカウンセリングのつどい」も行われている。

コーディネイトは事務局スタッフが急な依頼にも応えられる様に対応して支えている。前もって基本情報については市から提供されているが、初回はコーディネーターと一緒に訪問し、その時に詳しい情報を聞き取るようにしている。

【あんしんメイトの養成】

「あんしんメイト」は、介護経験者を条件にしているが、認知症の人は、疾患、症状、性格、環境などの違いにより、個々に合わせた対応が必要であり、自らの経験に頼ることは危険である。アルツハイマー病、脳血管性認知症、レビー小体病、ピック病とさまざまな疾患を持つ人に対応するためにはそれぞれの疾患の特徴を知ることが大切である。また、家族と話をすることも多いので、医療、ケア、制度、専門機関、権利擁護についての基本的な知識も必要になる。各家庭に入るので個人情報の保護の認識もきちんと持たなければならない。「あんしんメイト」となるにはそれらの内容をカリキュラムにいった養成講座を受けなければならない。

2日間にわたっておこなわれる養成講座について、初年度は委託費として予算化されておらず自前で行ったが、予想以上の利用と反響があったため、19年度からは養成講座についても予算化されるようになり、より充実した形で行うことができるようになった。

地域での支援のためには、養成講座を終了してからも研鑽は不可欠である。認知症の人とのかかわりをより良いものにしようと、当NPOのサロンでは自主的に定例勉強会を開催している。土・日・祭日を問わず、ほぼ毎日「あんしんメイト」の利用があるので、曜日によって参加できないメイトがないよう配慮して、毎月17日を定例勉強会とし、ミーティングと内外の講師による勉強会を行っている。ミーティングでは、メイト同士で様々な話し合いが持たれている。新たな発見も多く、熱意をもったメイトの前向きな姿が見られる。メイト達は「あんしんメイト」として誇りを持ち、常に心にゆとりを持って、利用者の気持ちに寄り添い、向き合いながら日々の難題を乗り越え

て行く。

サロンでは県内外の催しも掲示し紹介したり、ビデオやDVDを利用したり、書籍の貸し出しも行い学習の機会を提供し支援している。

.....

—あんしんメイト養成講座の体験発表から—

あんしんメイト 中嶋 喜子

私があんしんメイトをさせていただいて、丸2年、今3年目に入っています。

係わりのあった方が8名、ターミナル迄おつき合いさせていただいた方、家族の方の対応についていなくて辞退させていただいた方、入院された方など今迄に幾つかの出会いと別れがありました。今は3名の方を担当させていただいて居ます。時間は一回一時間から二時間それぞれの要望に合わせて、散歩やお話相手です。利用者の方は年齢、認知症の症状、環境個性の違いで千差万別です。

最初渡された資料をよく読んでお目にかかりますが、なかなかイメージ通りの対応が出来なくて1回目・2回目・3回目と回を重ねてやっとその人の何かが見えて来ると言った感じです。利用者の方とあんしんメイトの出会いは家族又は第三者からの希望要請から始まる事が多く、本人がメイトについて理解していなくて「何？この人？何しにきたの？」少しオーバーかもしれませんが、不可思議な存在から始まる事も有る様に思います。

訪問時は肩の力を抜いて友達のような感覚で姓や名前呼びかけ笑顔でゆっくり話しかけますが、会話の内容が繋がらず始めと終わりが違っていても「ふ～ん！そうなん！」と相槌を打ち同調し、相手の世界に入って行きお話は必ず受け入れ否定はしません。数分毎に同じ事をくり返しくり返し聞かれてもいつも最初と同じ様な気持ちで答えられる様に心掛けています。

話題に詰まると童謡や昔の歌を歌ったり、年配の方は「籠の鳥」や「二人は若い」など良くご存知で、最初は小さな声で口ずさむ程度でも繰り返していると大きな声と一緒に歌ってくれる時もあり、しばらくは共に楽しい時間を持つ事が出来ます。

以前ですが、別の部屋に居た家族の方が聞いていて「お母さんが歌った！」とビックリした顔が印象的でした。話のはずみで日頃見せない一面が飛び出す事もあります。でも何をしても短い時間しか集中出来ないのも特徴で、気分転換にお手玉や綾取りも相手の状況によって出して見ます。手に持ってなつかしように子供の頃の遊びを教えて下さったり、それに関連した話が弾み和やかなひと時を過ごす事もあります。勿論無視される場合もあり、そんな時はさっさと片づけます。盛り上がり、帰るとき「また来てね！」と玄関先迄来て見送って下さると、その時は心のキャッチボールが出来たと嬉しくなりますが、再度訪問すると「あんた誰？」「エッ！」と思う事もあります。

認知症の人の見守り支援とは、家族の方の介護軽減と、本人の状態を受容しておだやかなひと時を過ごしてもらうことが目的で、「何をどうすれば良い」と云うマニュアルがありません。基本は相手のお話を聞き同じ事をくり返すなら真剣にくり返し相槌を打てば自然とコミュニケーションが取れ、自分の存在を相手に知って貰う事も出来ます。しかし一石二鳥で出来る事で無く何回かの挫折もありました。今でも時々解らない事に直面します。相手から自分の評価が直接伝わらない分「これでいいのか？」と自問自答する事もあります。

でもその日によって二人の間に十年来の友達のような会話や雰囲気発展する事があり、その笑顔の中にかげがえの無い素直さ、普通の人間関係では味わえない子供の様な純真な心を見る事が出来ます。そんな時、この人と出会えて良かった！この活動をさせて貰えて良かった！と、自分の癒し

に感じ明日へと繋がって行きます。見守り支援の体験発表といえるかどうか分かりませんが、人生の先輩達を通して楽しくふれあい自分の勉強をさせていただいている今の私です。

あんしんメイト 上西 順子

こんにちはあんしんメイトの上西です。一年前には皆さんが今、座っておられる場所に私も座って講習を受けていました。

講習を受けてメイトになってからも対象者のお家へ行くのは自信がなく、スタッフのミーティングや勉強会にだけ参加していたのですが、メイトって友達って意味かな。クラスメイトとかルームメイトっていうからお友達のように「こんにちは、遊びに来ました」と訪問させていただいて帰る時には「また、おしゃべりに来させてね」と楽な気持ちで行かせていただいたらいいのかなと、解釈して活動するようになって一年近く経ちました。

対象者の方は十人十色ですが、共通するところは純粋なところだと思います。ふりかえってみると日常生活の中でも私に変化が occurred。例えば道で認知症の方かな。道に迷っておられるのかな？と思ったらすぐ声をかけられるようになりました。以前の私なら、「さわらぬ神にたたりなし」と避けていたでしょう。

また、ある時は白い杖を持った方が歩道であっちへ行ったりこちらへ戻ったりされているので「どこへいきたいのですか？」と声をかけました。

バス停を探して居られたのです。ちょうどバスも着いて「ありがとう」と言って下さりバスに乗られました。またある時は上着を着るのに苦労されているので、さりげなく裾をひっぱって上げたらすっと着られました。少し手が不自由な方だったのです。何気なく自然に出来るようになったのがうれしいです。

体を使って、心を使って、ちょっとだけ人の役に立つことをして、その人が一瞬でも幸福を感じていただけたら、こんないいことはないです。そしてそれが自分の幸せにつながると思います。

最後に私が言うのも生意気ですが、認知症サポートわかやまのスタッフの方々はやさしくて事務所の空気がやわらかく暖かいんです。この講習が終わったら一度事務所を訪ねてみて下さい。私達といっしょにお待ちしております。

.....

4. 活動の成果と今後の展望

【活動実績】 平成 18 年度（事業開始年度）

	新規申請 (累積)	利用人数	延利用時間数
4月	7 (7)	4	19.0
5月	6 (13)	11	63.0
6月	4 (17)	10	91.0
7月	1 (18)	12	129.0
8月	1 (19)	13	136.0
9月	1 (20)	13	139.0
10月	0 (20)	14	159.0
11月	3 (23)	16	160.0
12月	2 (25)	15	164.0
1月	0 (25)	15	146.0
2月	1 (26)	15	159.0
3月	2 (28)	20	205.0
計	28 (28)	158	1570.0

平成 20 年度

	新規申請 (累積)	利用人数	延利用時間数
4月	0 (62)	27	333.5
5月	1 (63)	28	320.0
6月	2 (65)	29	320.5
7月	5 (70)	35	365.5
8月	3 (73)	39	345.5

平成 19 年度

	新規申請 (累積)	利用人数	延利用時間数
4月	1 (29)	19	188.5
5月	2 (31)	18	188.5
6月	5 (36)	17	199.5
7月	1 (37)	22	235.5
8月	3 (40)	21	220.0
9月	4 (44)	23	257.5
10月	3 (47)	26	291.5
11月	1 (48)	26	295.5
12月	4 (52)	27	277.0
1月	2 (54)	27	262.0
2月	5 (59)	25	281.5
3月	3 (62)	29	291.0
計	34 (62)	280	2988.0

平成 18 年度の「あんしんメイト」派遣は利用人数 158 人、延利用時間数 1,570 時間であった。平成 19 年度になると 280 人が利用、延利用時間数 2,988 時間となり、利用人数は 1.8 倍、延利用

時間数は約 2 倍近い伸びとなっている。既に 5 ヶ月終了した今年度も昨年の同時期と比べると利用人数が 1.7 倍、延利用時間数も 1.7 倍の伸びとなっている。この成果をふまえ、市の苦しい台所事情の中で予算も 20% アップとなった。利用が増えることで事務局での仕事量も増すことから、今まで事務局スタッフのボランティアに頼っていたコーディネートについても今後は予算化される見通しである。

実施していく中で、利用し易くするために利用単位は 1 時間単位から 30 分単位に変わった。また、開始当初は利用できなかった一人暮らしの人や 65 才以下の人に対しても、必要な場合が生じたときはケースバイケースで対応できるようになった。「あんしんメイト」は介護を経験したことのある人が条件となっているため、家族からの相談ごとも多く寄せられる。今後は本人の見守りのみならず家族へのケアも必要とされており、介護家族対象の訪問カウンセリングなどの支援に向けて準備を進めている。

「あんしんメイト」を 1 年以上継続して利用している家族にアンケートをとった。結果は次のとおりである。

●派遣事業はどこで知りましたか？

市役所	1	ケアマネ	6
電話相談	1	家族の会	2
事業所	1	会報	1
ニュース和歌山	2	無記入	1

●気軽に話しかけやすいですか？

話しかけやすい	1 2
まあ話しかけやすい	3

●メイトは、家族・本人の思い・願い・要望を
わかっていると思われますか？

よく理解している	8
まあ理解している	5
よくわからない	1
その他	メイトにより違う

●メイトは柔軟な対応をしますか？

よく対応する	1 0
まあ対応する	4
その他	メイトにより違う

●家族から見て本人はメイトと過ごす時間に
満足していると思われますか？

満足している	1 0
どちらとも言えない	3
わからない	2

●あんしんメイト利用で本人の様子に変化が
ありましたか？

少し良い変化	7
変わらない	5
とても良い変化	1
無記入	2

●変化の内容

◇家族とは違った会話を楽しんでいる様子。 ◇明るい方が来られ歌を歌ってくれるので、ひとりでも歌うようになった。 ◇ヘルパーとは違うがこの人に是非会いたいという関係にまだなっていない。 ◇妄想がなくなってきた。 ◇散歩に付き添って頂き嬉しそうです。 ◇きちんと対応するメイトの時はとても楽しそうで次も来られるのを待っているがメイトによっては帰られたあと不安定です。 ◇人の話の内容が少し理解できるようになった。 ◇話題が増した。来てくださることを楽しみにしている。

●現在のサービスに満足ですか？

たいへん満足	7
まあ満足	8

●ご意見を

◇たまにお会いしたときは励まされ、今の状態を肯定的に捉えて下さるので明るい気持ちになれる。

◇家族の自由な時間が与えられ感謝… 2家族 ◇もう少し長時間入ってほしい。 ◇施設は年末年始休みになるのであんしんメイトの方にはその間お願いしたい。 ◇担当を固定し関係が深まる存在になってほしい。 ◇家族へのアドバイスの時間も作ってください。 ◇どこまでメイトさんをお願いしていいのか。 ◇いつも感謝している。日増しに病状が進む中、大変なことと思われるがよろしくお願いします。 ◇人により好き嫌いがあるようで、来て頂いているメイトさんにはその日により態度が違うようです。 ◇家族としては水分補給が出来助かっています。

.....

アンケートに見られるように家族からは好意的な意見が殆どであるが、メイトによっては不安定になるとの記述もある。アンケートは19年8月実施であり、現在は各メイトのスキルアップと新しいメイトに対する研修にも工夫が見られ、徘徊や、混乱など認知症の周辺症状の軽減には目を見張るケースも多い。今後も、毎月の勉強会を重ね、自身の経験を積み人間性をスキルアップさせる事は対人援助での要である。

介護保険サービスを利用している利用者のサービス担当者会議に「あんしんメイト」として出席することも多い。利用者の大きな変化を目の当たりにしたケアマネージャーから他の家族を紹介されるなど、利用者や家族の信頼を得られるようになって来ており、利用も広がってきている。

現在20代～70代の男女49人が「あんしんメイト」として登録している。50代60代の人が多く、家族介護を終えた人、仕事をリタイアした人に支えられている。今後、高齢者及び認知症の人が増大するのが現実であり、社会を引退しても必要とされ自分を活かせることで社会参加できる場があるのは誰にとっても生きがいであり、認知症高齢者とその家族を支援すると共にメイト自身の介護予防になり得るなら、こんなすばらしい事はない。メイトの声を以下に挙げる。

.....

—会報「認知症サポートわかやまたより」から—

あんしんメイト 渡辺 優

認知症の方は「何も分からない」「何も出来ない」と思わないで欲しい。

認知症になっても全てが失われた訳ではありません。物忘れはあっても心は生きている。人間としての感情は普通の人と同じだと、メイトに入ってわかりました。一見楽天的に見えても、失われて行く記憶に心の中は深刻なとまどいと不安を感じています。そして、いままで出来たことが出来なくなったジレンマ、自分が自分で無くなっていく、これは本人にとってはものすごく不安です。失われた能力の回復を求めるよりも、残された能力を大切に、たとえ認知症になっても安心して暮らせる社会にと、そのお手伝いをするのが認知症サポートわかやまのあんしんメイトです。

認知症の人のお宅へ訪問して一緒に時間を過ごすのですが、大切なのは“心のゆとり”。自分自身の心のゆとり無くして他人の心を理解することは出来ないと思います。そして次に自分が楽しんでなければ、相手に楽しい気持ちが伝わらない。だから訪問する際には、気持ちを切り替え、「よーし、今日も楽しくやろう」と気合いを入れます。そして利用者の方にどうしたら喜んでもらえるか、どうしたら笑っていきいきと暮らして頂けるか？常に創意工夫しています。

あんしんメイト 片山衣利子

あんしんメイトのサポーター養成講座を受講して、認知症という病気を知ること、それからどのようなケアをしていくのが大切なのかを学びました。認知症の人の行動を否定する対応をしてしまいがちでも、あれはダメ、これはダメと言って役割や仕事を取り上げてしまわずにその人らしさを大切にすることですが、家族の方の毎日では接し方が分かっているのに、認知症という病気をなかなか受け入れられずに葛藤し疲れ果ててしまったりします。

父のケアをしていた母は、いつも「何故こんな病気になったんやろう?」「あんなに食事や健康に気配りして毎日散歩をかねてよく歩くことを心がけていたのに」と、どんどん進んでいく症状にとっても悲しんでいました。まだ父とおしゃべりが出来た時に、今私が活動している「あんしんメイト」として色々な話が出来ていたら、もっと父と接しられたのではと、心が痛みます。でも「あんしんメイト」として活動していなかったら、父の気持ちも家族の思いも分からずにいたでしょう。まだまだ勉強中ですが、認知症の人と家族の方々と接していきたいと思います。

今「あんしんメイト」として行かせられている利用者さんは76歳の女性で1年弱のお付き合いです。その方の小さかった頃の話や仕事をされていた頃の忙しい日々のお話やご苦労された事などを聞かせていただいて、その方の明るい性格でいろいろなことを乗り越えてこられたんだなあと思いました。その方と接する時間は、日々忙しくしている私の生活の中で、二人だけの時間を過ごせるゆったりした時間になっています。

ある日こういう事がありました。「仕事に行かなくちゃ」とその方が言われるので「じゃ一緒に行こうか」と私はその方の後につづき一緒に部屋を出て屋上に行くのです。今は暑いのですが、日蔭で10分ほど一緒にいて「さあ帰ろうか」と二人で又部屋に戻ります。

さて次は何の話かな?おしゃべりが続きます。

.....

認知症サポートわかやまでは和歌山県と協働し、県下の多くの地域で家族介護者を対象に相談交流会を目的とした「つどい」が持てるよう取り組んでおり、県や自治体の委託事業や独自事業として他団体とも連携しながら、現在県内4地域で定例の「つどい」を開催している。また、定例に向けての単発の「つどい」の開催も毎年数か所の地域で行っており、それをきっかけに自治体独自の取り組みにつながっていくケースもみられている。今後、県内の各地域で開催される「つどい」とも連動しながら他の地域にも認知症高齢者の見守り支援が広がるように関係機関と協力していきたい。

県内ではこの6月に西牟婁郡白浜町の社会福祉協議会主催で認知症高齢者の見守り支援員養成講座が開かれた。活動に向けての準備も整い出しており、当NPOへの問い合わせに参考資料を提供するなどして応援し協力している。また、田辺市でも地元のNPOが見守り支援に向けて具体的な準備を進めており、当NPOからも運営推進委員として加わっている。

「あんしんメイト」の活動は県内外から注目されており、介護家族や関係機関から、問い合わせ・希望が多く寄せられている。今は和歌山市のみの活動であるが、今までに培われたノウハウを提供し、今後は県内を始めとして全国にこのような活動が広がっていくことを期待する。



あんしんメイト派遣



見守りが必要な認知症の人を、家族が留守の時や家族が休息したい時、居宅又は支援ルームにて「あんしんメイト」が、見守りを行います。

- 対象者**
- 本人または家族が和歌山市にお住まいの方
 - 65 歳以上の認知症高齢者
 - 週 3 時間までは無料

- 申込み窓口：**
- 地域包括支援センター
 - NPO 法人認知症サポートわかやま事務局

あんしんメイト利用者アンケート (H19.8月実施) H18～H19 の利用者 16 件中 15 件回答

- 家族から見て本人はメイトと過ごす時間に満足していると思われますか？

満足している	10
どちらとも言えない	3
わからない	2

- メイトは、家族・本人の思い 願い 要望をわかっていると思われますか？

理解している	8
まあ理解している	5
よくわからない	1
その他	メイトにより違う

- あんしんメイト利用で本人の様子に変化は？

少し良い変化	7
変わらない	5
とても良い変化	1
無記入	2

- ご意見を

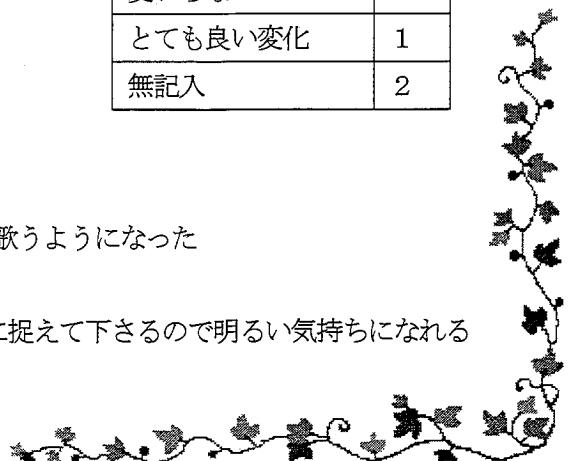
◇家族とは違った会話を楽しんでいる様子

◇明るい方が来られ歌を歌ってくれるので、ひとりでも歌うようになった

◇妄想がなくなってきた

◇たまにお会いしたときは励まされ、今の状態を肯定的に捉えて下さるので明るい気持ちになれる

◇家族の自由な時間が与えられ感謝



活動報告(7)

活動名称	地域と共に歩む老人ホームを目指して
活動要旨	スローガンは「地域と共に、ボランティアと共に歩む老人ホーム」。月1回「ホーム喫茶」を開催し、家族、地域住民が、ゲストの余興やカラオケ大会などを楽しむ。開催は300回を超え、時に笑い、議論を重ねて、施設と地域の連携が強くなっている。
応募者	社会福祉法人ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名
連絡先	〒903-0802 沖縄県那覇市首里大名町 1-43-2

1)推薦理由

- ・ 300 回続くホーム喫茶が地域住民の交流の場となっており、地道にかつ継続的に取り組まれている活動である点が素晴らしい。
- ・ 特別養護老人ホームが地域の中核となって、地域住民の中に積極的に出て行って相互協力を行いながらネットワークを強化することで、地域のつながりの再生の場の役割を果たしている。堅苦しい取り組みでなく、地域の人々が自然体で楽しみながら輪が広がっている点が素晴らしい。
- ・ 地域が過疎化している今、他の福祉施設にもぜひ学びとってほしい要素が多く、施設と地域の1つの「あるべき姿」を提示してくれており、とても参考になる。

2)3月7日キャンペーン発表会 <発表資料>

地域と共に歩む
老人ホームを目指して

～地域連携の雰囲気醸成のために一役買っているホーム喫茶～



沖縄県
社会福祉法人ゆうなの会
特別養護老人ホーム大名

特別養護老人ホーム大名の紹介

- ・特別養護老人ホーム大名(100名定員)
- ・短期入所生活介護(8名定員)
- ・通所介護(4単位)、認知症対応型通所介護(1単位)
- ・認知症対応型共同生活介護(1か所)
- ・訪問介護(2か所)
- ・訪問看護(1か所)
- ・居宅介護支援事業所(2か所)
- ・宅配給食(那覇市社協委託)
- ・介護タクシー



地域との連携を重視している施設

- 施設のパフレットに「地域と共に、ボランティアと共に歩む老人ホーム」と謳っており、地域と支え合い、助けあう施設運営を旨としている。
- 大名地域福祉推進会(大名地区社会福祉協議会)をはじめ、大名地域の自治会、民生委員・児童委員、大名小学校、ボランティア等と連携して各種行事等を行うと共に、施設を拠点として地域住民との相互交流も盛んに行われている。



地域との連携(1)



地域住民が地域防災協力員として河同参加・協力する施設の総合防災訓練



地域住民も一助になって長寿をお祝いする地域バレード



大名地域福祉大運動会では老人ホーム大名も地域の1つのチームとして参加します



地域バレードでは多くの地域住民の皆さんが喜んで駆けつけて下さいます。

地域との連携(2)



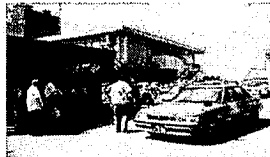
おはや机城の祭りとして定着している大名まつり



生かがいづくり・健康づくりを目的に毎月行われるふれあい交流会



まつりの会場船場から、運営・片付けまで地域住民の協力がある大名まつり



個人タクシー営業支部の協力を得て毎年行われる敬老ピクニック

ホーム喫茶とは

- ホーム喫茶は毎月第4金曜日の19時～22時に開催されるパーティー形式の行事であり、参加者は施設入居者・家族・職員だけでなく、ボランティアや多数の地域住民の皆さんに参加いただいている。
- 参加者は美味しい料理やお酒に舌鼓を打ちながら、毎月来るゲストの余興や参加者同士の交流を楽しみにしている。
- ホーム喫茶は313回もの会を重ねており、参加者同士の親睦を深める場となっている。



ホーム喫茶の様子



大名第二団地三線教室の皆さんによる演奏



毎月、多彩なゲストの余興が披露されるホーム喫茶



お酒はもちろん、参加者同士の語らいは何よりも深し



バイキング食は和食・洋食・デザート、様々な料理が準備される。

ホーム喫茶の果たしている役割

- ホーム喫茶の参加者には自治会役員や大名地域福祉推進会のメンバー、民生委員、ボランティアその他多くの地域住民が含まれており、それに老人ホーム大名スタッフも加わり、参加者同士がお酒を酌み交わしながら親睦を深め、時には笑い、時には議論を重ねながら、ネットワークを強化させている。そのネットワークが地域連携に活かされている。
- 気軽に参加できるホーム喫茶だからこそ、地域に浸透した行事となり、それが施設の理解者・協力者の輪を広げている役割を果たしている。

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

地域と共に歩む老人ホームを目指して

～地域連携の雰囲気を醸成するために一役買っているホーム喫茶～

沖縄県那覇市にある特別養護老人ホーム大名では、施設を拠点として地域住民との相互交流が盛んにおこなわれている。施設のパンフレットにも「地域と共に、ボランティアと共に歩む老人ホーム」と謳っており、地域と支え合い、助けあう施設運営を旨としている。

地域がホームの応援を必要としている部分に関してはホームが応援を行い、ホームが地域の応援を必要としている部分に関しては地域の支援をお願いする。そのような地域とホームがお互いに助け合うような相互協力が行なわれているが、その相互協力の雰囲気を醸成させている行事の一つとして毎月第4金曜日に施設で開催されるホーム喫茶がある。

ホーム喫茶とは毎月施設で開催されるパーティー形式の行事であり、参加者はホーム入居者や家族、施設職員だけでなく、近隣の地域住民にも多数参加いただいている行事である。参加者はおいしい料理やお酒に舌鼓を打ちながら、毎月来るゲストの余興や参加者同士の交流を楽しみにしており、この行事が毎月定期的に開催されることによって参加者同士の親睦が深まり、参加者同士のネットワークの強化に繋がっている。

またこのホーム喫茶には、地域の自治会役員や大名地域福祉推進会（大名地区社会福祉協議会）のメンバー、民生委員・児童委員、ボランティア、福祉関係者その他多くの地域住民がいることから、施設と地域組織との連携強化にも繋がっている。

2. 地域の紹介

特別養護老人ホーム大名がある那覇市首里大名町は 19 もの町から構成される首里地区の一つの町であり、那覇市の北東部に位置している。首里大名町は戦前は 110 世帯程度の小さな町であったが、沖縄戦で廃墟と化し、戦後は生き残った人々が再び町に住み始めていった。沖縄の本土復帰を機に大名市営団地の建設や民間会社による団地建設が相次ぎ、県内各地から多くの人々が移り住むようになり、現在では 1,800 世帯余りの住民が住む首里地区でも 2 番目に大きな町へと成長した。

首里地区の人口の急増に伴い、昭和 52 年 4 月には城北小学校から分離して大名小学校が創立され、その隣の敷地に特別養護老人ホーム大名が昭和 54 年 9 月に開所した。また那覇市社会福祉協議会が推進する小学校区単位に地区社協（地区社会福祉協議会）を作ろうという活動方針に従い、昭和 59 年には大名地域福祉推進会（大名地区社協）が結成され、特別養護老人ホーム大名を拠点とした地域福祉活動が広がっていった。

大名町に地域福祉活動が広がっていった要因の一つとして大名小学校の P T A 役員経験者が自治会の役員になったり、その後、大名地域福祉推進会の役員となって地域全体の結びつきを強化していった点は見逃せない。この大名地域福祉推進会が大名小学校の P T A や自治会などの地域組織と特別養護老人ホーム大名を有機的に結びつけけるきっかけとなっていく。

「ここはわが街みんなでつくるコミュニティ」のスローガンのもと、昭和 59 年に大名地域福祉推進会は発足し、それ以降「支え合い助け合いのまちづくり」を合言葉に、地域住民の連帯感を高め、福祉の輪を広げるための活動を行なっている。

那覇市社会福祉協議会が目指す「住民の主体的参加による福祉のまちづくり」の施策である小学校区ごとの地区社会福祉協議会がいちはやく大名町に結成されたのは、地域住民の協力体制の基盤ができていた背景がある。

また自治会活動についても一言触れておくと、那覇市は住民の自治会加入率が低く、全世帯のわずか 23.6% が加入しているにすぎないのに対し、首里地区は 40.2%、大名町では 61% もの加入率を誇っていることから、地域住民の連帯が那覇市の他の地域と比較し、強い地域であることが理解できるであろう。

3. 活動の内容

地域と施設の連携強化を図るため、特別養護老人ホーム大名ではホームの理事・評議員会のメンバーに地域の自治会役員や大名地域福祉推進会（地区社会福祉協議会）役員、隣の大名小学校校長等の地域組織の役員に就任して頂き、ホームが地域と連携を図りやすい組織体制を敷いて施設運営を行なっている。

それでは特別養護老人ホーム大名が地域と共にどのような活動を実際に行なっているのかについて概観してみよう。

1) 地域活動の内容について

行事・活動等	施設との連携先	活動内容
ふれあい交流会	民生委員・児童委員 各種ボランティア	毎月第3土曜日の10:00～13:00に行なわれる昼食会。地域の高齢者の生きがいをづくり・健康づくり・閉じこもり防止等を目的としており、参加者はおいしい食事はもちろん、ゲストの余興や参加者同士で行うレクリエーションを楽しみにしている。
大名まつり	各自治会 大名地域福祉推進会 民生委員・児童委員 各種ボランティア等	大名まつりは職員だけでなく、各種ボランティアや自治会、大名地域福祉推進会、民生委員等の協力を得ており、会場設営から後片付けまで地域住民が一体となって取り組んでいる地域の夏祭りとして定着している。
大名地域福祉大運動会	大名地域福祉推進会 各自治会 民生委員・児童委員 大名小学校 那覇市社会福祉協議会	大名地域福祉推進会が主催して行なう幼児からお年寄りまで参加できる運動会（大名小学校にて開催）。各自治会を中心としたチーム対抗の運動会となっているが、特別養護老人ホーム大名も地域の一つのチームとして運動会に参加している。ホーム入居者も応援したり、トリムマラソン競技の折り返し地点となるホーム正面玄関前で選手にキスマークをつけるチェックマーカの役割として運動会に参加している。この運動会を通してホームが地域と一体感を感じる契機となることも多い。
友愛訪問・敬老会	民生委員・児童委員 自治会 大名地域福祉推進会	友愛訪問に関しては、大名町の一人暮らし高齢者宅に民生委員・大名地域福祉推進会のメンバーらと共に訪問し、激励すると共に記念品を贈呈している。 また友愛訪問の参加メンバーは午後に行わ

		れる施設の敬老会にも参加いただいている。
地域防災協力委員会	大名地域福祉推進会 自治会	特別養護老人ホーム大名では地域住民による地域防災協力委員会が設置されており、火災等の場合には緊急通報システムを通して地域防災協力員の自宅に電話連絡が入るホットラインで結ばれている。ホームの年3回の防災避難訓練には地域防災協力員にも毎回参加協力いただいている。
大名職員による伝統芸能エイサーの演舞	自治会 大名地域福祉推進会	大名地域福祉大運動会や各自治会主催の祭りでエイサーの演舞依頼があった場合には職員のエイサー隊が出張演舞を行なっている。その他地域の各種行事や余興の一環でエイサー演舞の依頼を受けることも多い。
ふれあい給食サービス	那覇市社会福祉協議会 民生委員・児童委員 自治会 ボランティア	那覇市社会福祉協議会委託の宅配給食サービス。毎週木曜日、首里地区に住む約45名の一人暮らし高齢者宅に夕食を届けているが、特徴的なのは数多くのボランティアが関わっている点だ。ホームが調理を担当し、その後婦人会のボランティア「あじさい会」が弁当を盛り付け、民生委員や自治会等の配達ボランティアが地域のクリーニング店、電器店、商店等16の拠点に配達。さらに友愛訪問のボランティアが高齢者宅まで見守りを兼ねて配達を行なっている。
敬老ピクニック	個人タクシー首里支部 民生委員・児童委員	敬老月間に個人タクシー首里支部の皆さんが一日タクシーを開放し、ホーム入居者やデイサービス利用者らを一日行楽地へ案内してくれる行事。
その他	・隣の大名小学校の児童との交流も年に数回行なわれている。福祉教育の一環としてホーム入居者やデイサービス利用者とふれあい交流の場を設けたり、ホーム内の環境整備（清掃）に取り組んでもらったり、学習発表会で披露する歌や劇などをホーム入居者に対しても披露したり、また児童が育てた花の苗木をメッセージと共に入居者にプレゼントしたり…等々の関わりがある。 ・沖縄では数えの97歳にはカジマヤーという大きなお祝いがあり、そのお祝いには家族だけでなく、近隣住民あげてお祝い該当者の健康や長寿をお祝いします。特別養護老人ホーム大名の場合も該当者がホーム館内をパレードするだけでなく、オープンカー等を利用して	

地域にパレードに行っている。その際、地域の拠点3ヵ所には地域住民の皆さんが該当者の長寿や健康を祝うと共に、長寿をあやかるために多くの地域住民の方々が集まって祝ってくれます。

- ・大名地域福祉推進会や民生委員・児童委員に対してはホームで話し合いの場を提供したり、また必要な備品の貸し出しも行なっている。地域の自治会に対しても要望に応じて施設を開放している。



大名まつりは地域の方々の協力も多く、地域の祭りとして定着している

特別養護老人ホーム大名では、老人ホームの各種行事に近隣の地域住民に参加・協力を得ている一方、他方では地域の行事に対して老人ホームのスタッフ・入居者が参加・協力するという相互交流が生まれています。その相互交流が生まれたきっかけには大名町にある自治会、大名地域福祉推進会、地域の民生委員・児童委員、大名小学校等との連携があげられます。またその連携強化に一役買っているのが、特別養護老人ホーム大名にて毎月1回開催されているホーム喫茶であるが、このホーム喫茶について焦点をあてて説明していきたい。

2) ホーム喫茶の紹介

毎月第四金曜日の19:00~22:00、特別養護老人ホーム大名では月1回の“ホーム喫茶”に多くの参加者が集い、楽しいひとときを過ごしています。ホーム喫茶とは、もともと特別養護老人ホームに入居したとしてもお酒や食事を楽しみたいねという趣旨でスタートした行事であり、平成20年8月現在、309回もの会を重ねています。

ホーム喫茶への参加者は施設の調理スタッフが腕によりを掛けて作った料理やお酒を楽しみながら、毎月訪れるゲストの余興や参加者同士のカラオケ十八番大会等を楽しんでいます。

3) ホーム喫茶を通しての連携強化

このホーム喫茶の参加者にはホーム入居者やその家族はもちろんのこと、実は地域の自治会役員

や大名地域福祉推進会のメンバー、民生委員・児童委員、ボランティア、福祉関係者その他多くの地域住民が含まれている。それに特別養護老人ホーム大名のスタッフも加わり、参加者同士がお酒を酌み交わしながら親睦を深め、時には笑い、時には議論を重ねながら、参加者同士のネットワークを強化していることは見逃せない。

ホーム入居者にとっては、家族や地域の人々と交流を深める場となり、また地域の参加者にとっては各々が取り組む地域活動やホーム行事、その他様々な話題が大名スタッフとの間で交わされ、お互いのことを知る場にもなっている。いつもホーム喫茶への常連として参加している参加者が施設の地域防災協力員として活躍していたり、各種ボランティアのメンバーとして施設で活躍している人が多いことも見逃せない点である。またホーム喫茶での交流を通して生まれた余興ボランティア等も数多い。



毎月第4金曜日に行なわれるホーム喫茶。毎月多彩なゲストをお迎えしている。

4. 活動の成果と今後の展望

地域住民が誰でも気軽に参加できるようなホーム喫茶のスタイルを 300 回余りも継続することによって、この特別養護老人ホーム大名に対する地域の理解者は増えていったし、また特別養護老人ホームの職員も大名町という地域や大名地域福祉推進会等の地域組織に対する理解も深めていった。ホーム喫茶というパーティー形式の楽しい雰囲気やお酒の力も手伝って参加者同士がお互いに意気投合して親睦を深めていくなど、参加者同士のネットワークは次第に強化されている。その参加者同士のネットワークが強化されるに伴って、地域住民から新たな協力の申し出があり、それが新たなボランティア活動へと繋がった成果は見逃せない。

今後は特別養護老人ホームが有する介護に関する知識や技術（介護方法や認知症に関する知識等）を地域で広く共有し、大名地域に住む高齢者が安心して自宅生活が送れるように支援していきたい。

また特別養護老人ホームで活動するボランティアは多数おられるものの、入居者の趣味・生きがいづくりに繋がるような活動はまだ十分に提供できていないことから、今後は地域住民の力を借りて、入居者の趣味・生きがい活動を支援できるようなボランティア活動の開発を目指していきたい。